

青森市埋蔵文化財調査報告書 第124集

国史跡高屋敷館遺跡

環境整備報告書Ⅲ

平成30年度

青森市教育委員会

国史跡高屋敷館遺跡

環境整備報告書Ⅲ

平成30年度

青森市教育委員会



11世紀の史跡高屋敷館遺跡推定復元図(故高島成侑氏画)



史跡高屋敷館遺跡整備状況1(S→)



史跡高屋敷館遺跡整備状況2(S→)



史跡高屋敷館遺跡内郭から山元（1）遺跡内区画施設を望む(NE→)

例　　言

1. 本書は、国の補助金交付を受けて平成 18～30 年度に実施した史跡高屋敷館遺跡環境整備事業の成果を収録したものである。
2. 事業の実施にあたっては、文化庁文化財部記念物課及び青森県教育庁文化財保護課の指導・助言を受けた。
3. 本書刊行以前の事業内容及び基本構想・基本計画については、以下にまとめられている。

浪岡町教育委員会 2001『平成 12 年度浪岡町文化財紀要Ⅰ』
浪岡町教育委員会 2005『平成 16 年度浪岡町文化財紀要Ⅴ』
青森市教育委員会 2008『国指定史跡高屋敷遺跡 環境整備基本構想・基本計画』
青森市教育委員会浪岡教育事務所 2006『国史跡高屋敷館遺跡 環境整備報告書Ⅱ』
4. 本書の作成及び編集は、青森市教育委員会が行い、木村淳一が担当した。なお、第Ⅲ章第 2 節については、設楽政健が執筆した。また、第Ⅲ章第 3 節は、次の方々から玉稿を賜った（敬称略）。箱崎真隆（国立歴史民俗博物館）・木村勝彦（福島大学）・佐野雅規（早稲田大学）・對馬あかね（名古屋大学）・李貞（総合地球環境学研究所）・中塚武（総合地球環境学研究所・名古屋大学）
5. 掃図の縮尺は、各図にスケールを付した。なお、写真図版の縮尺は、統一を図っていない。
6. 図版番号及び表番号並びに写真番号は、「第〇図」、「第〇表」、「写真〇」とし、順番に通し番号を付した。なお、第Ⅲ章第 3 節については、執筆者の表記に従った。
7. 出土遺物及び原団・データ等については、一括して青森市教育委員会が保管している。

例言
目次

第Ⅰ章 事業実施の概要	1
第1節 史跡高屋敷館遺跡の概要	1
1. 位置とアクセス	1
2. 指定状況	1
第2節 事業の実施体制・概要	1
1. 事務局体制	1
2. 事業概要	3
第3節 年度別整備工事等費用	4
第Ⅱ章 史跡整備の設計・施工内容	7
第1節 本報告以前の施工内容	7
1. 平成16年度	7
2. 平成17年度	7
第2節 平成18～30年度の史跡整備設計・施工内容	7
1. 平成18年度	7
2. 平成19年度	11
3. 平成20年度	15
4. 平成21年度	18
5. 平成22年度	22
6. 平成23年度	23
7. 平成24年度	25
8. 平成25年度	29
9. 平成26年度	31
10. 平成27年度	35
11. 平成28年度	39
12. 平成29年度	43
13. 平成30年度	50
第Ⅲ章 資料編	63
第1節 高屋敷館遺跡出土土器	65
第2節 高屋敷館遺跡出土鉄闕連遺物について	73
第3節 酸素同位体比年輪年代法による高屋敷館遺跡東塙橋脚の年代検証	77
報告書抄録、引用・参考文献	81
既刊埋蔵文化財関係報告書一覧	

第1章 事業実施の概要

第1節 史跡高屋敷館遺跡の概要

1. 位置とアクセス

国史跡高屋敷館遺跡は、青森市浪岡地区に所在している。浪岡地区は、平成17年4月に旧青森市と新設合併した旧南津軽郡浪岡町の行政区域内に相当する。

市町村合併により一つの市となったものの、①奥羽山脈から延びる大沢迦丘陵・梵珠山系を境に分水嶺が異なること、②鎌倉時代以降郡制が布かれた時点では、旧浪岡町（浪岡地区）は津軽山辺郡に含められたが、旧青森市は外浜の領域であったことなど、二つの地区は、地理的にも歴史的にも大きく異なる背景がある。

遺跡は、梵珠山系に連なる前田目台地の標高40～44mに位置し、台地の一段下の東側には岩木川水系の大沢迦川が南流している。

国史跡指定のきっかけになった国道7号浪岡バイパス建設事業における発掘調査の成果により、遺跡の保存とバイパスの迂回が決定しており、史跡は迂回した国道7号浪岡バイパスの隣接地に所在している。

JR青森駅から約21.5km（車で約30分）、新青森駅から約17.5km（車で約22分）で、史跡に最も近いJR奥羽本線大沢駅からは約2.4km（車で約3分）の距離である。

2. 指定状況

名称：史跡高屋敷館遺跡

所在地：青森県南津軽郡浪岡町大字高屋敷字野尻
(現：青森県青森市浪岡大字高屋敷字野尻)

12番/5のうち実測4,982平方メートル、21番のうち実測14平方メートル、23番/1、23番/2、23番/6、29番/1のうち実測303平方メートル、37番/1のうち実測1,347平方メートル、38番/1、38番/2、40番/1、40番/2、40番/7、41番/1のうち実測603平方メートル、41番/5のうち実測783平方メートル、41番/6のうち実測1,281平方メートル、41番/16のうち実測633平方メートル 右^{ヨリ}の地域に介在する道路敷及び水路敷を含む。

指定年月日：平成13年1月29日

官報号外第15号 文部科学省告示第18号

種別：史跡

面積：29,762.72 m²

指定理由：津軽中部に所在する大規模な濠と土塁を巡らした平安後期の環濠集落跡。濠と土塁を巡らす遺跡は、一般に弥生時代や中世に見られるが、古代のものは、近年、律令国家の直接支配が及ばない東北地方北部と北海道南部のみに分布することが明らかになった。本遺跡は、同種の遺跡を代表し、この地域の社会情勢を具体的に示すものとして重要である。



第1図 史跡高屋敷館遺跡位置図

第2節 事業の実施体制・概要

1. 事務局体制

平成18年度

教育長	角田 譲二郎
教育部長	古山 善猛
教育次長	相馬 政美
教・施設開拓課	遠藤 正夫
主幹	多田 弘仁
主査	工藤 幸子
文化財主事	木村 淳一
"	小野 貴之
"	児玉 大成
"	設楽 政健
主事	當麻 良人
"	越谷 美由紀
"	田中 浩司
"	竹ヶ原 亜希(担当)

平成19年度

教育長 角田 譲二郎

教育部長	古山 善猛	"	児玉 大成
教育次長	相馬 政美	"	設楽 政健
舞・文化財監修取扱 主幹	遠藤 正夫	主事	吹田 夕貴
主査	藤村 和人	"	対馬 広将 (担当)
文化財主査	木村 淳一	平成 23 年度	
文化財主事	小野 貴之	教育長	月永 良彦
"	児玉 大成	教育部長	小野寺 晃
"	設楽 政健	教育次長	金澤 保
主事	吹田 夕貴	文化財課長	吉田 豆
"	竹ヶ原 亜希 (担当)	主幹	木村 浩一 (担当)
平成 20 年度		"	川村 範規
教育長	角田 証二郎	主査	齊藤 寛和
教育部長	古山 善猛	文化財主査	木村 淳一
教育次長	今村 貴宏	"	小野 貴之
舞・文化財監修取扱 主幹	遠藤 正夫	"	児玉 大成
主査	藤村 和人	主事	設楽 政健
"	工藤 幸子	"	吹田 夕貴
"	工藤 雅仁	"	中村 健祐
文化財主査	木村 淳一	"	三上 貴子
"	小野 貴之	平成 24 年度	
文化財主事	児玉 大成	教育長	月永 良彦
"	設楽 政健	教育部長	小野寺 晃
主事	越谷 美由紀	理事事務官	工藤 寿彦
"	竹ヶ原 亜希 (担当)	教育次長	金澤 保
平成 21 年度		文化財課長	吉田 豆
教育長	月永 良彦	主幹	木村 浩一 (担当)
教育部長	小林 順一	"	川村 範規
教育次長	今村 貴宏	主査	齊藤 寛和
舞・文化財監修取扱 主幹	遠藤 正夫	文化財主査	木村 淳一
主査	上野 富士子	"	小野 貴之
"	工藤 幸子	"	児玉 大成
"	工藤 雅仁	主事	設楽 政健
文化財主査	木村 淳一	"	中村 健祐
"	小野 貴之	"	三上 貴子
"	児玉 大成	平成 25 年度	
文化財主事	設楽 政健	教育長	月永 良彦
主事	高石 知世	教育部長	福井 正樹
"	吹田 夕貴	理事事務官	工藤 寿彦
"	対馬 広将 (担当)	文化財課長	成田 聖明
平成 22 年度		(~2026.2.7) 吉田 豆	
教育長	月永 良彦	主幹	木村 浩一 (担当)
教育部長	小林 順一	"	川村 範規
理事兼教育次長	小野寺 晃	文化財主査	木村 淳一
舞・文化財監修取扱 主幹	遠藤 正夫	"	小野 貴之
主査	上野 富士子	"	児玉 大成
文化財主査	木村 淳一	主事	設楽 政健 (担当)
"	小野 貴之	"	中村 健祐
		"	三上 貴子

平成 26 年度

教育長 月永 良彦
 教育部長 福井 正樹
 理事 成田 聖明
 文化財課長 白取 優也
 副理事 木村 浩一（担当）
 主幹 堀野端 活昭
 主査 齋藤 寛和
 " 澤谷 結美子
 文化財主査 木村 淳一（担当）
 " 小野 貴之
 " 児玉 大成
 " 設楽 政健
 主事 雪田 幸誠
 " 笹田 貴子

平成 27 年度

教育長 月永 良彦
 教育部長 成田 聖明
 理事 横山 克広
 文化財課長 白取 優也
 主幹 伊丸岡 裕之
 " 児玉 大成
 主査 齋藤 寛和
 " 澤谷 結美子
 " 辻村 泰成
 文化財主査 木村 淳一（担当）
 " 小野 貴之
 " 設楽 政健
 主事 雪田 幸誠
 " 里村 真吾

平成 28 年度

教育長職務執行者（～H28.6.2）佐藤 克則
 教育長 成田 一二三
 教育部長 石澤 幸造
 理事 横山 克広
 文化財課長 渡邊 薫
 主幹 藤 一天
 " 児玉 大成
 主査 工藤 洋樹
 " 澤谷 結美子
 " 辻村 泰成
 " 里村 真吾
 文化財主査 木村 淳一（担当）
 " 小野 貴之
 " 設楽 政健
 主事 須田 知未子

平成 29 年度

教育長 成田 一二三
 教育部長 横山 克広

理事 工藤 裕司
 文化財課長 渡邊 薫
 主幹 工藤 一天
 " 児玉 大成
 主査 田中 美奈子
 " 工藤 洋樹
 " 辻村 泰成
 " 里村 真吾
 文化財主査 木村 淳一（担当）
 " 小野 貴之
 " 設楽 政健
 主事 須田 知未子

平成 30 年度

教育長 成田 一二三
 教育部長 工藤 裕司
 理事 佐々木 淳
 参事兼文化財課長 葛西 俊一
 主幹 工藤 一天
 " 児玉 大成
 主査 田中 美奈子
 " 工藤 洋樹
 " 辻村 泰成
 " 里村 真吾
 文化財主査 木村 淳一（担当）
 " 小野 貴之
 " 設楽 政健
 主事 工藤 耕治

2. 事業概要

本事業は、高屋敷館遺跡が平成 13 年 1 月 29 日に国の史跡に指定されたことを受け、旧浪岡町が平成 13 年度及び平成 15 年度に史跡指定地の公有化を実施し、その後、平成 17 年度に合併した青森市が史跡の保護に向けた盛土工事を中心に進めてきた。

平成 19 年度には、整備基本構想及び基本計画を策定し、平成 20 年 1 月 21 日に『国指定史跡高屋敷館遺跡 環境整備基本構想・基本計画』としてまとめている（青森市教育委員会 2008）。基本理念として、国史跡高屋敷館遺跡の次世代への継承のため適正な保存を図り、多くの人に親しめるような活用を目指す前提で整備を進めることとしている。また、基本計画では、①復元的整備区域、②保存・修景区域、③学習施設等設置区域のゾーニングを前提に保存・保護事業、遺構復元整備、活用・ガイダンス施設等についても触れている。

平成 24 年度からは遺構の表示に関する工事等を進め、土壘・壕・櫓・門などの一部の遺構については、立体表示とし、竪穴建物跡については、整備対象とした 11 世紀前半の建物 12 棟について平面表示

とした。また、史跡の南側に国土交通省が史跡見学者も利用できる簡易パーキングを整備することとなり、平成 30・31 年度の 2 カ年で進めることとなった。その他、ガイダンス施設については、既に供用されている青森市中世の館の展示室の一部を市の単独経費で改修し、青森県埋蔵文化財調査センターから譲与された発掘調査の出土品の展示なども含め、平成 31 年度から供用することとしている。

年度別の事業実績については、第 1 表を参照されたい。

第3節 年度別整備工事等費用

平成 18 年度

環境整備工事（有）清工業 4,866,750 円

平成 19 年度

環境整備工事（有）水木土建 5,461,450 円

平成 20 年度

環境整備工事（有）石村興産 7,196,700 円

平成 21 年度

環境整備工事（有）開成工業 5,575,500 円

環境整備工事〔⁽⁶⁾〕（有）開成工業 2,195,550 円

平成 22 年度

環境整備工事（有）小笠原重機建設 6,995,100 円

平成 23 年度

実施設計 ハートエンジニアオフィス（有） 1,575,000 円

環境整備工事（有）開成工業 3,465,000 円

平成 24 年度

環境整備工事（有）開成工業 4,389,000 円

平成 25 年度

環境整備工事（有）開成工業 3,579,800 円

平成 26 年度

実施設計 （有）ウッドサークル 1,630,800 円

環境整備工事（有）水木土建 4,082,400 円

平成 27 年度

環境整備工事（有）開成工業 5,130,000 円

平成 28 年度

設計調整 （有）ウッドサークル 842,400 円

環境整備工事（有）鎌田組 4,785,480 円

平成 29 年度

工事監理 （有）ウッドサークル 1,566,000 円

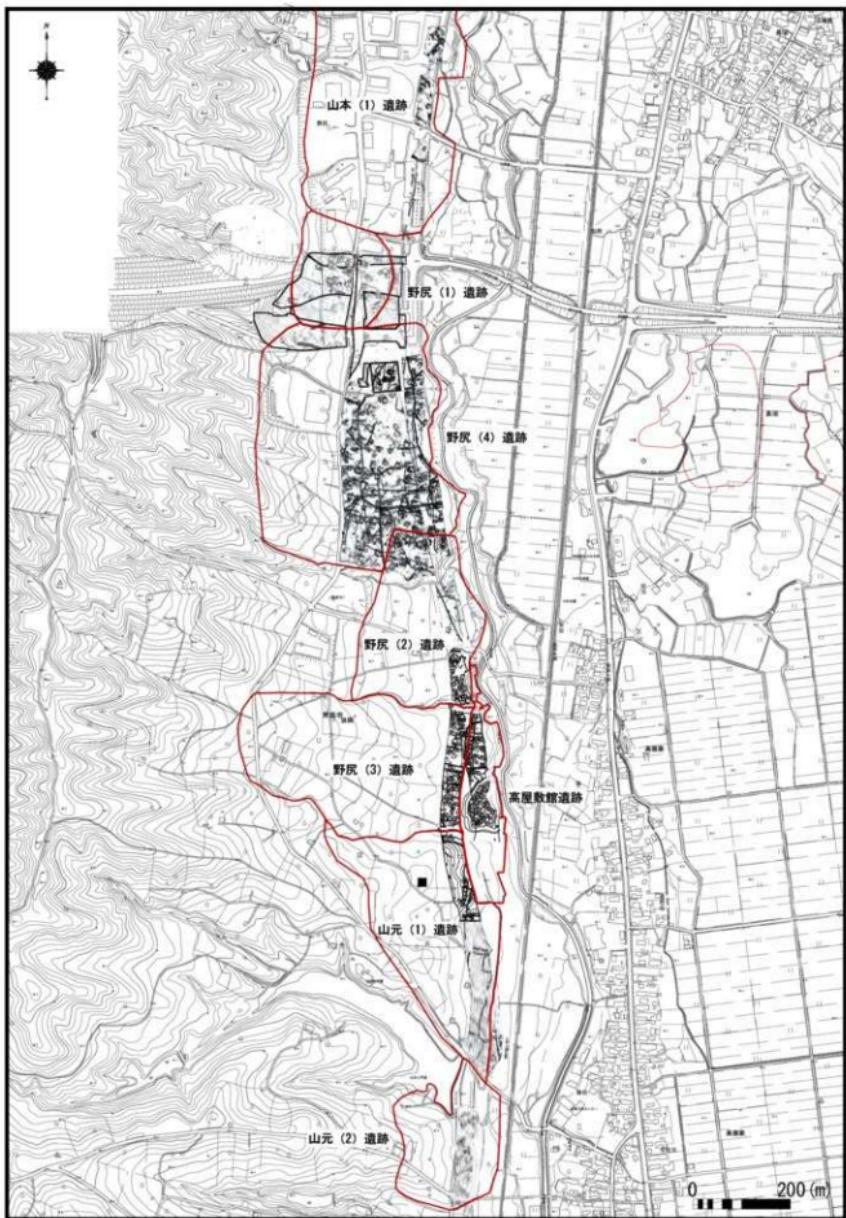
環境整備工事（株）アオケン 17,111,520 円

平成 30 年度

工事監理 （有）ウッドサークル 2,116,800 円

環境整備工事（株）市川土建 45,908,640 円

第1表 史跡高麗牧館道跡年度別事業実績表



第2図 高屋敷館遺跡及び周辺の道路

第Ⅱ章 史跡整備の設計・施工内容

第1節 本報告以前の施工内容

1. 平成16年度

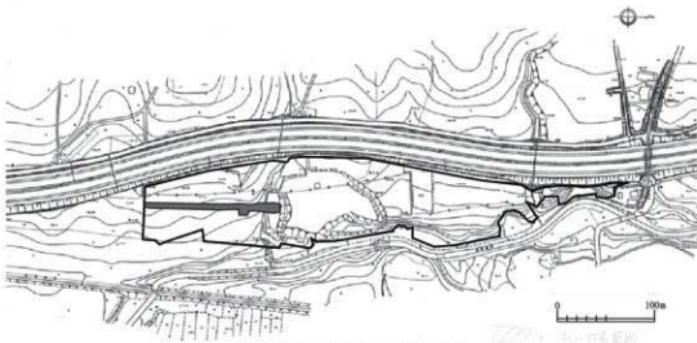
青森県埋蔵文化財調査センターが調査を実施した部分の保護盛土が極めて薄く、凍上や雑草木の根による二次的遺構破壊が懸念されたため、堅穴建物跡を中心とした358m²を対象に、人力で埋戻しを実施した。

※浪岡町教育委員会 2005『平成16年度浪岡町文化財紀要V』所収

2. 平成17年度

史跡南側の史跡境界の地点から主要部(内郭)に向けて上幅5m、延長142mの作業用通路(900m)を造成した。

※青森市教育委員会浪岡教育事務所 2006『国史跡高屋敷跡遺跡環境整備報告書II』所収



第3図 平成17年度工事対象範囲図

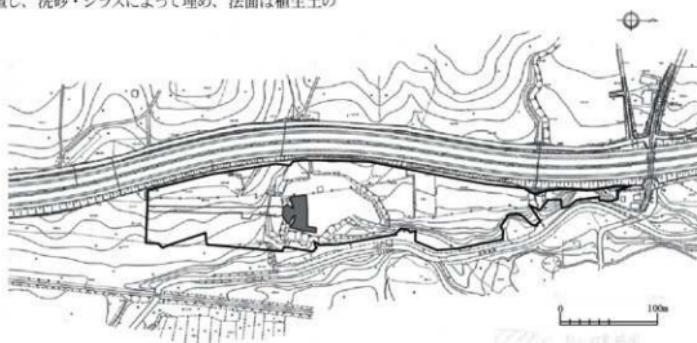
第2節 平成18～30年度の史跡整備設計・施工内容

1. 平成18年度

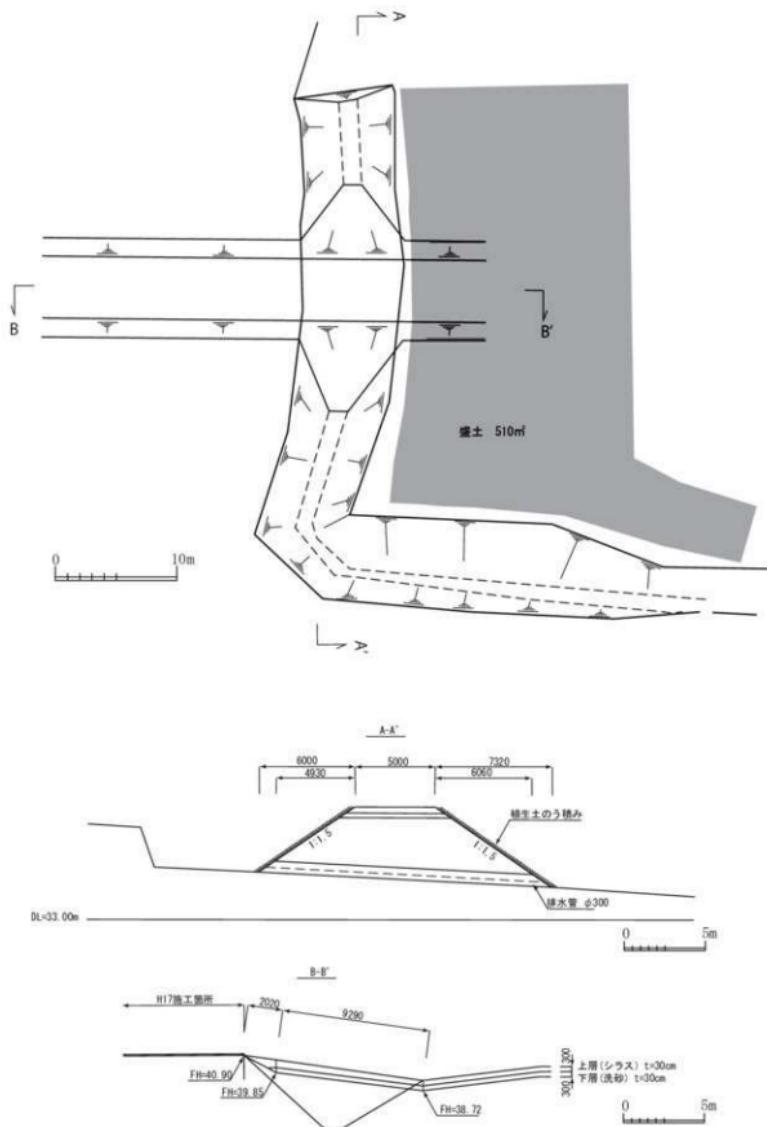
平成17年度に造成した作業用通路から内郭に入るため、塹の一部(40m²)を埋め、作業用通路を造成する工事を計画した。塹は最下部に排水用の暗渠管を設置し、洗砂・シラスによって埋め、法面は植生土の

う積みによって崩落を防止した。

また、内郭の一部510m²に上層シラス(t=30cm)、下層洗砂(t=30cm)の保護盛土を実施した。



第4図 平成18年度工事対象範囲図



第5図 平成18年度工事設計図



塹盛土着工前 (N→)



塹盛土完成 (N→)



塹盛土砂搬入 (NW→)



塹盛土砂転圧状況 (W→)



塹盛土植生土のう設置状況 (N→)



塹盛土暗渠管設置状況 (E→)



塹盛土着工前 (W→)



塹盛土完成 (W→)



内郭盛土着工前 (W→)



内郭盛土完成 (W→)



内郭盛土砂敷均し状況 (E→)

内郭盛土砂転圧状況 (W→)

内郭盛土砂厚さ測定状況 (S→)



内郭盛土シラス搬入状況 (N→) 内郭盛土シラス転圧状況 (W→) 内郭盛土シラス厚さ測定状況 (S→)

2. 平成19年度

平成18年度に実施した内郭の保護盛土箇所から北側へ保護盛土を延ばす工事と、南塙～東側の一部にかけて塙の埋戻しと法面工を計画した。

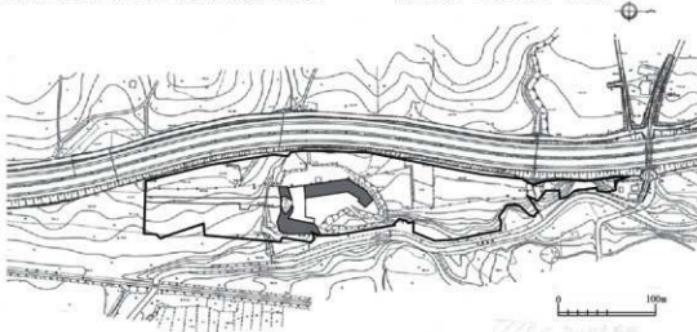
当初の設計から、工事施工に際し設計した地形と実際の地形が異なる箇所があり、数量に変更が生じたこ

とと事業促進のため、内郭平場の保護盛土を増工した。

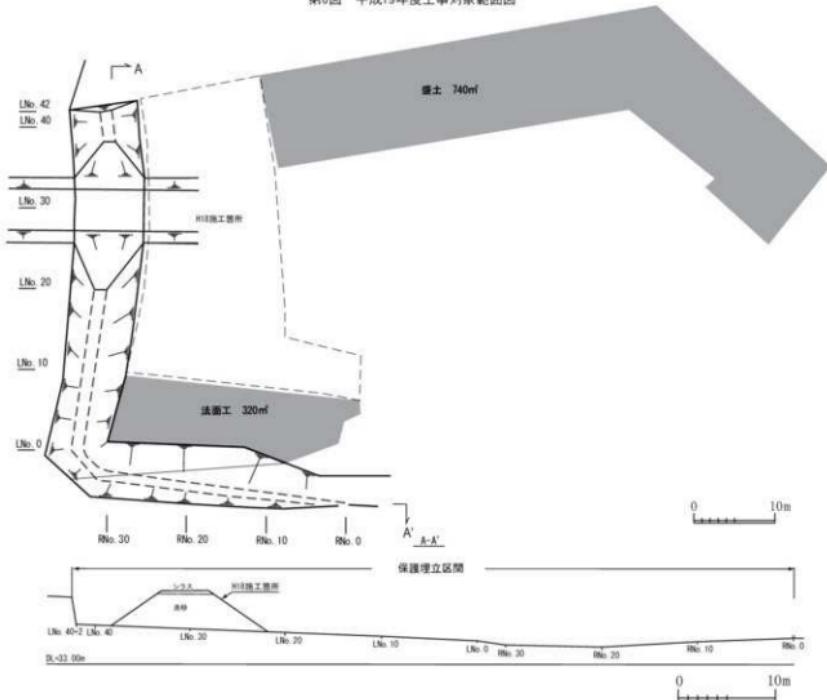
盛土（シラス） 当初 130m³ → 570 m³

内郭盛土 当初 60 m³ → 740 m³

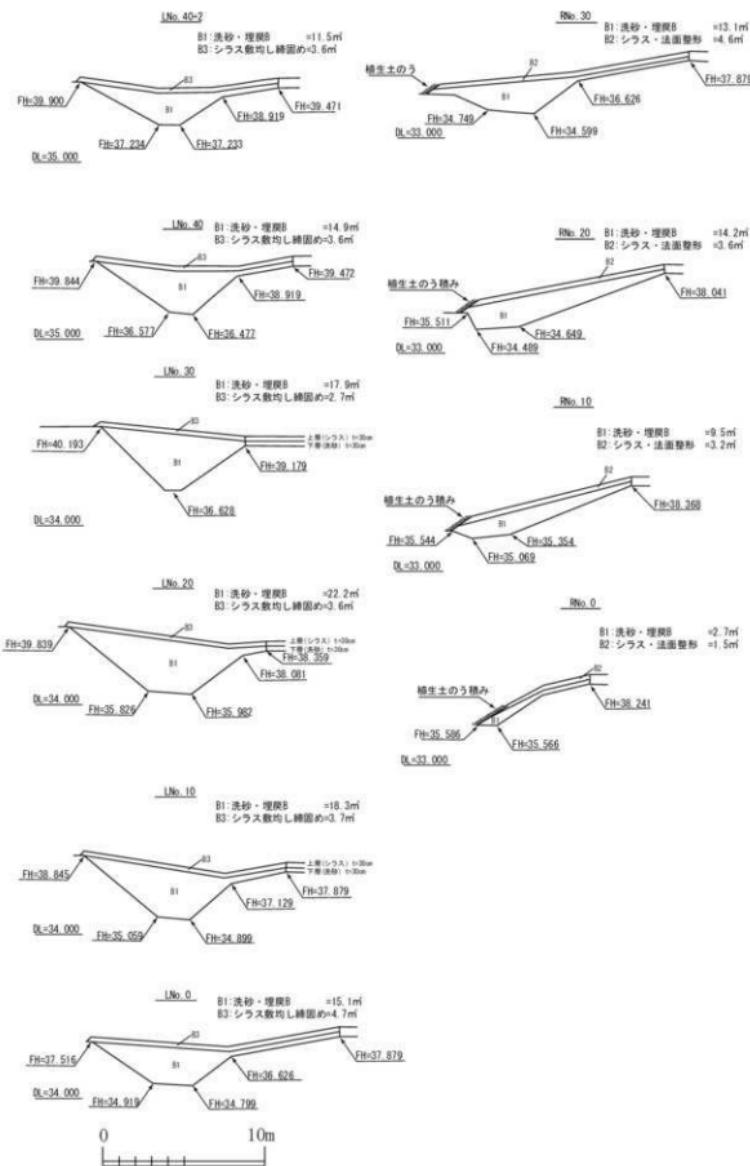
法面整形 当初 280 m³ → 320 m³



第6図 平成19年度工事対象範囲図



第7図 平成19年度工事設計図①



第8図 平成19年度工事設計図②



塙盛土・法面工着工前 (E→)



塙盛土・法面工完成 (E→)



塙盛土・法面工砂敷均し状況 (S→)



塙盛土・法面工植生土のう積上げ状況 (SE→)



南西侧塙盛土着工前 (NE→)



南西侧塙盛土完成 (NE→)



南西侧塙盛土敷均し状況 (E→)



南西侧塙盛土転圧状況 (E→)



内郭盛土着工前 (S→)



内郭盛土完成 (S→)



内郭盛土砂敷均し状況 (N→)



内郭盛土幅測定状況 (E→)



内郭盛土砂厚さ測定状況 (S→)



内郭盛土シラス転圧状況 (S→)



内郭盛土法面補正状況 (W→)

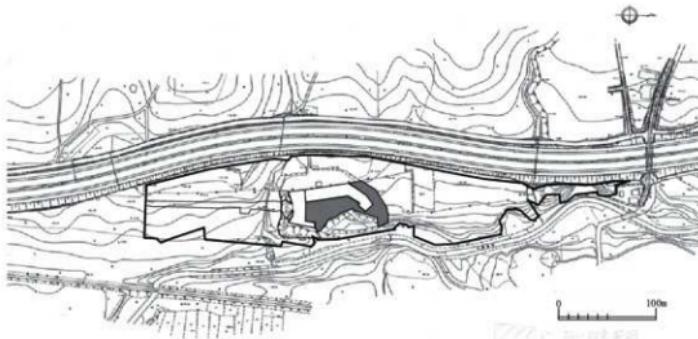


内郭盛土シラス厚さ測定状況 (S→)

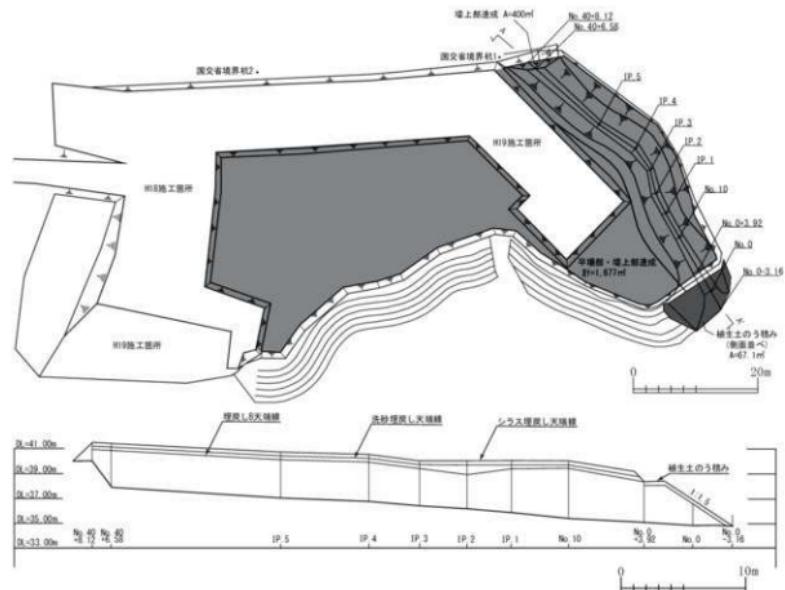
3. 平成20年度

平成10年度までに実施した内部の保護盛土箇所から、青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行った北塙の埋戻しと法面工、内郭の748 m²を対象とした保護盛土を計画した。

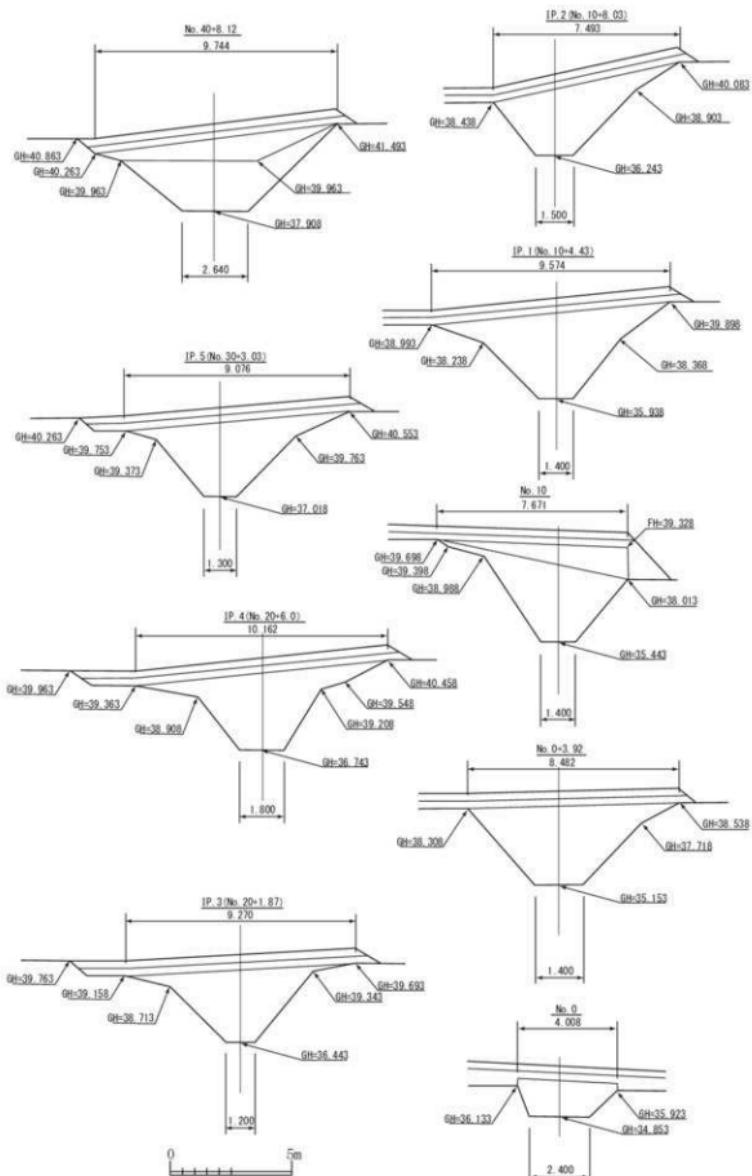
工事に際し、内部の平場の保護盛土について増工し、平場と塙上部の土工について 1,677 m²を対象に工事を実施した。



第9図 平成20年度工事対象範囲図



第10図 平成20年度工事設計図①



第11図 平成20年度工事設計図②



内郭盛土着工前 (S→)



内郭盛土完成 (S→)



内郭盛土シラス敷均し状況 (S→)



内郭盛土幅測定状況 (S→)



法面工着工前 (W→)



法面工完成 (W→)



塙盛土敷均し状況 (N→)

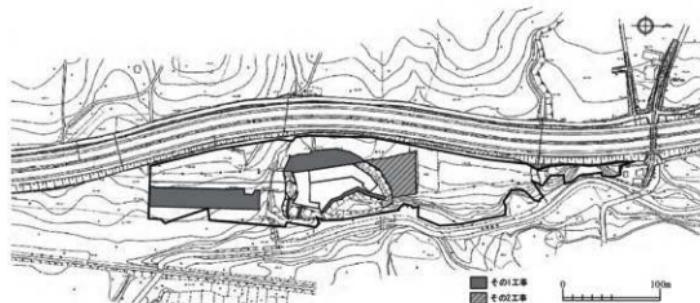


塙盛土転圧状況 (S→)

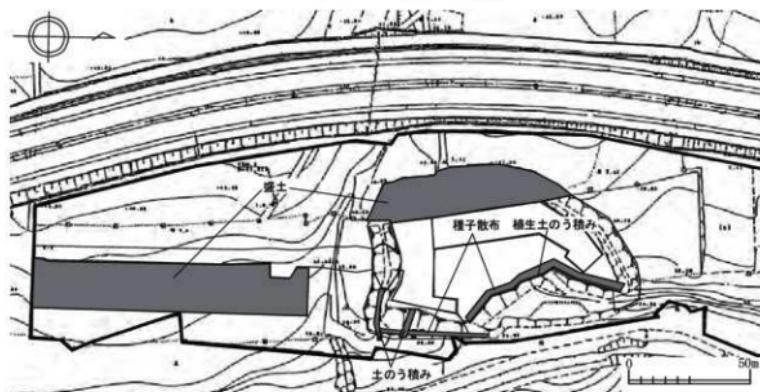
4. 平成21年度

内郭の西側の地区(1,090m²)と史跡南側の作業道路の東側(1,500m²)を対象とした保護盛土と内郭東側斜面の植生土のう積み(74.0m³)、種子散布(340.0m²)

等の工事(その1工事)と、主要部の北側(999m²)を対象とした保護盛土工事(その2工事)の二つの工事を実施した。



第12図 平成21年度工事対象範囲図



植生土のう・種子散布標準図(内部)

3500

種子散布

盛土標準図(内部・外郭平場)

1000

上層 シラス t:300

下層 洗砂 t:300~

土のう標準図(内郭)

2500

植生土のう積み

0 [m]

土のう・植生土のう

1000

160

160

160

土のう積み

600

400

0

50cm

500

300

160

第13図 平成21年度工事(その1) 設計図



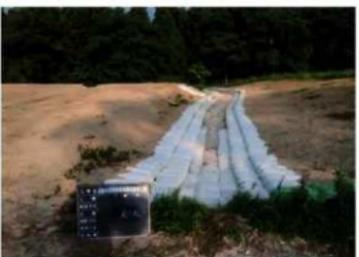
内郭盛土着工前 (N→)



内郭盛土完成 (N→)



内郭土のう工着工前 (W→)



内郭土のう工完成 (W→)



内郭土のう工着工前 (W→)



内郭土のう工完成 (W→)



内郭植生土のう工・種子吹付着工前 (N→)



内郭植生土のう工・種子吹付完成 (N→)



内郭植生土のう積み状況 (S→)



内郭盛土敷均し状況 (N→)



内郭盛土転圧状況 (E→)



内郭土のう積み状況 (ES→)



外郭盛土着工前 (S→)



外郭盛土完成 (S→)



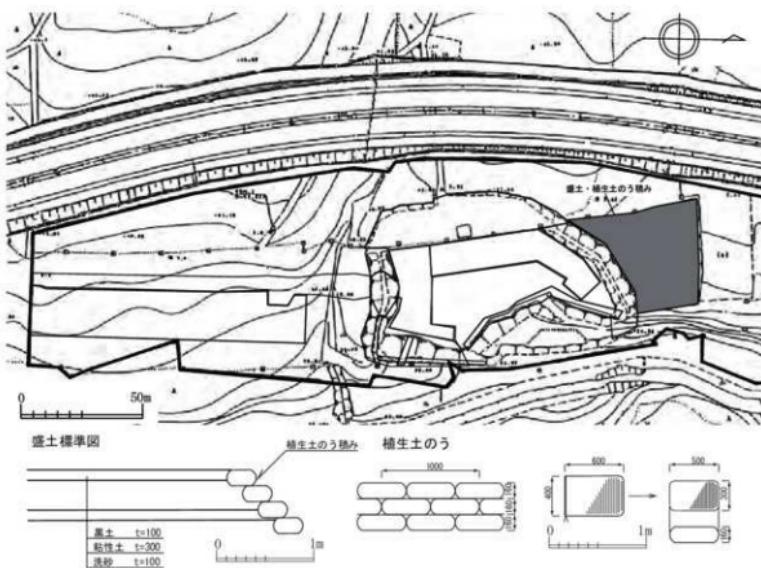
外郭盛土敷均し状況 (W→)



外郭盛土シラス厚さ測定状況 (S→)

その2工事は最下層に洗砂($t=10\text{cm}$)、中層に粘性土($t=30\text{cm}$)、表層に黒色土($t=10\text{cm}$)で盛土を行い、東側の斜面には植生土のう積みを実施した。

なお、事業促進のため、保護盛土($L=27\text{m} \rightarrow 35\text{m}$)と植生土のう積み面積($24\text{ m}^2 \rightarrow 29\text{ m}^2$)を増工している。



第14図 平成21年度工事（その2）設計図

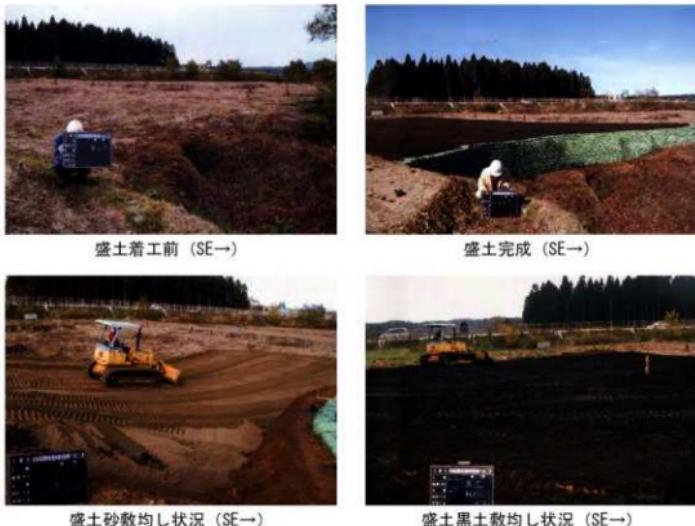
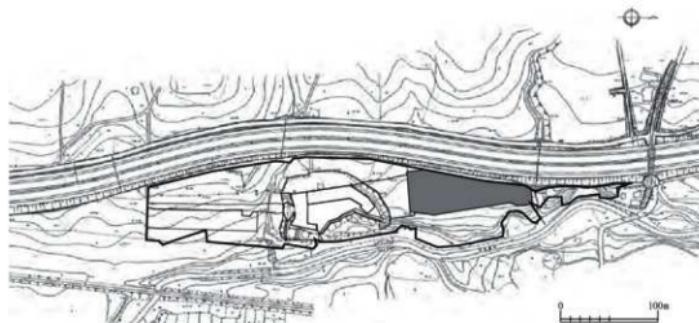


写真8：平成21年度工事（その2）写真

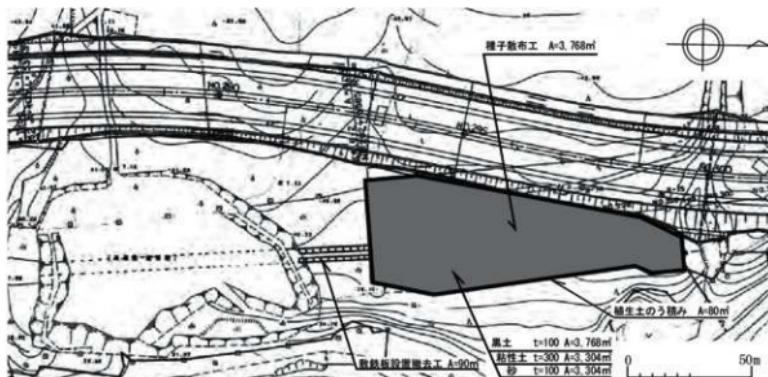
5. 平成22年度

平成21年度対象地の北側2,992m²を対象に、前年度と同様の盛土、法面には植生土のう積みを行い、

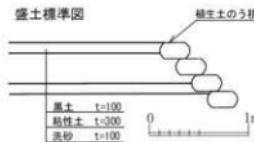
加えて種子散布を実施した。なお、事業促進のため、対象面積を3,768m²に増工している。



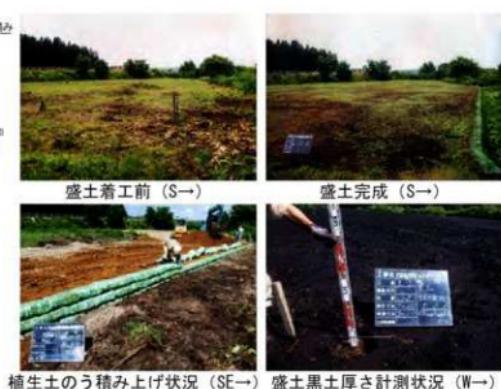
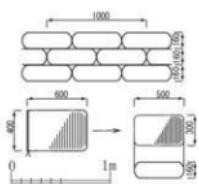
第15図 平成22年度工事対象範囲図



盛土標準図



植生土のう



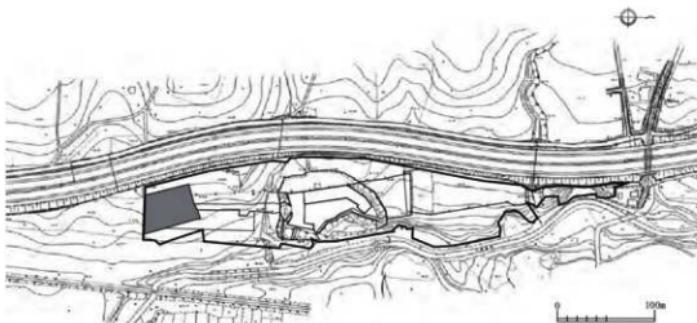
第16図 平成22年度工事設計図

写真9 平成22年度工事写真

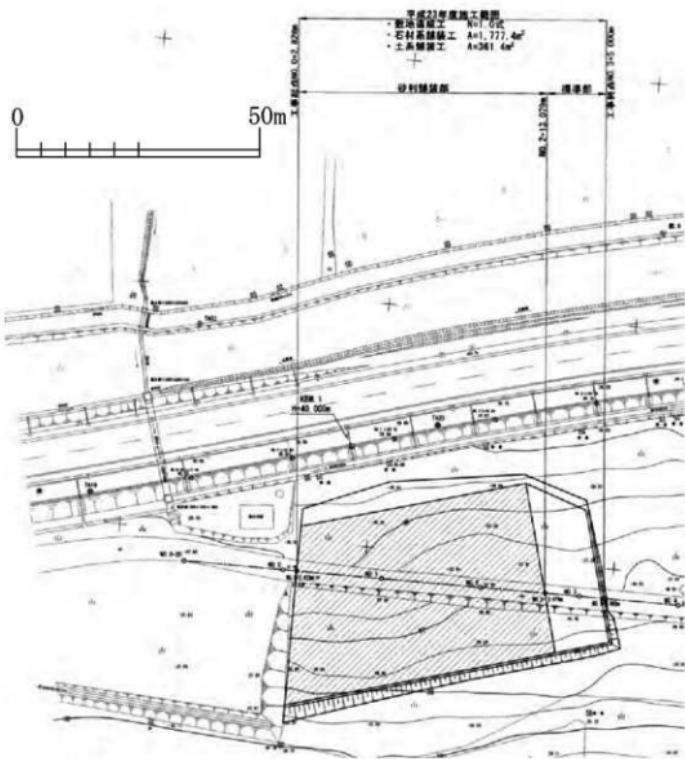
6. 平成23年度

史跡範囲南端の1,777 m²を対象に、敷砂利を行う計画で工事実施した。なお、工事途中で盛土の土量が

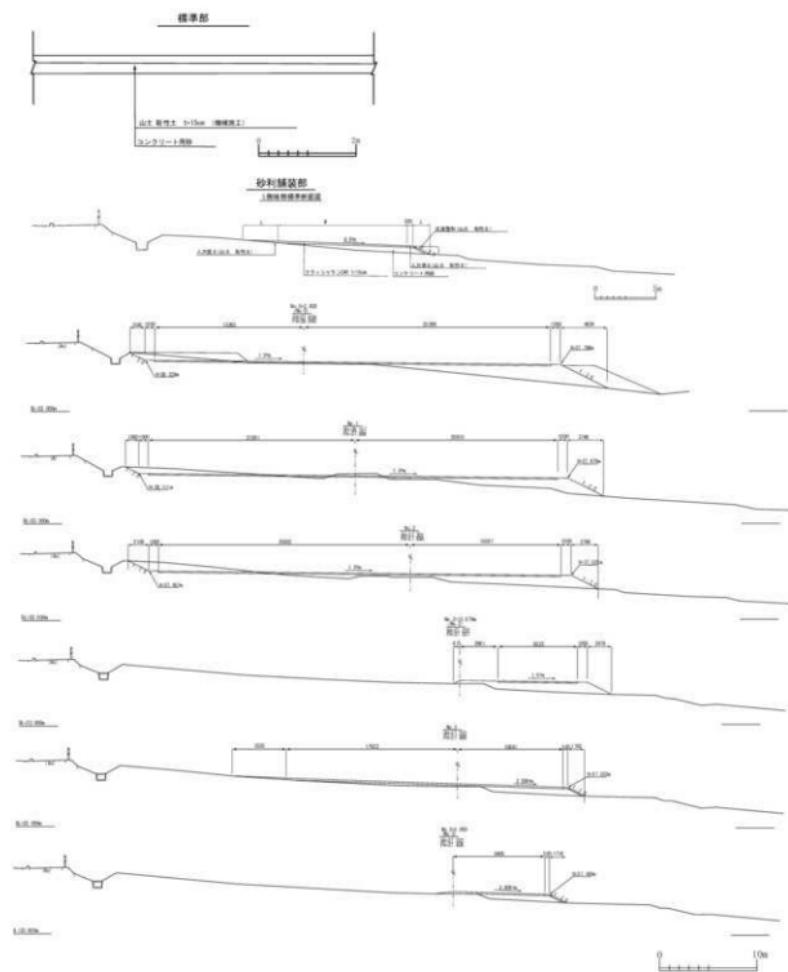
想定より増加したため、敷砂利面積を250 m²に変更し、法面部分の植生土のう積みを追加している。



第17図 平成23年度工事対象範囲図



第18図 平成23年度工事設計図①



第19図 平成23年度工事設計図②



盛土着工前 (S→)

盛土完成 (S→)

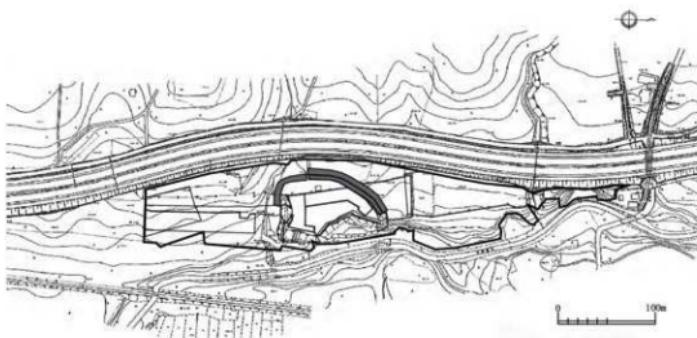
盛土転圧状況 (E→)

写真10 平成23年度工事写真

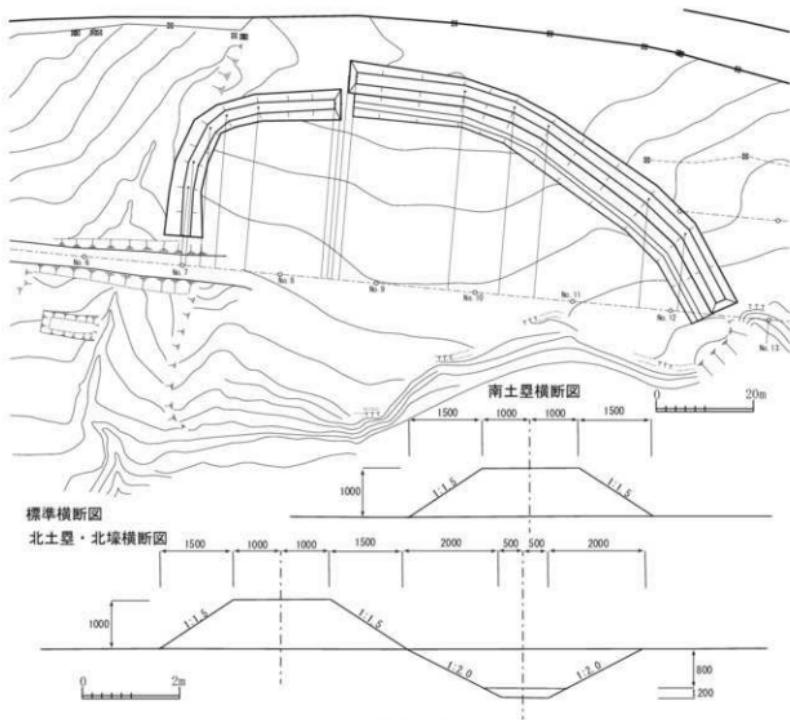
7. 平成24年度

内郭の西側の土壠(北土壠L=95.12 m、南土壠50.62 m)と北塙(L=95.12 m)を対象に工事実施

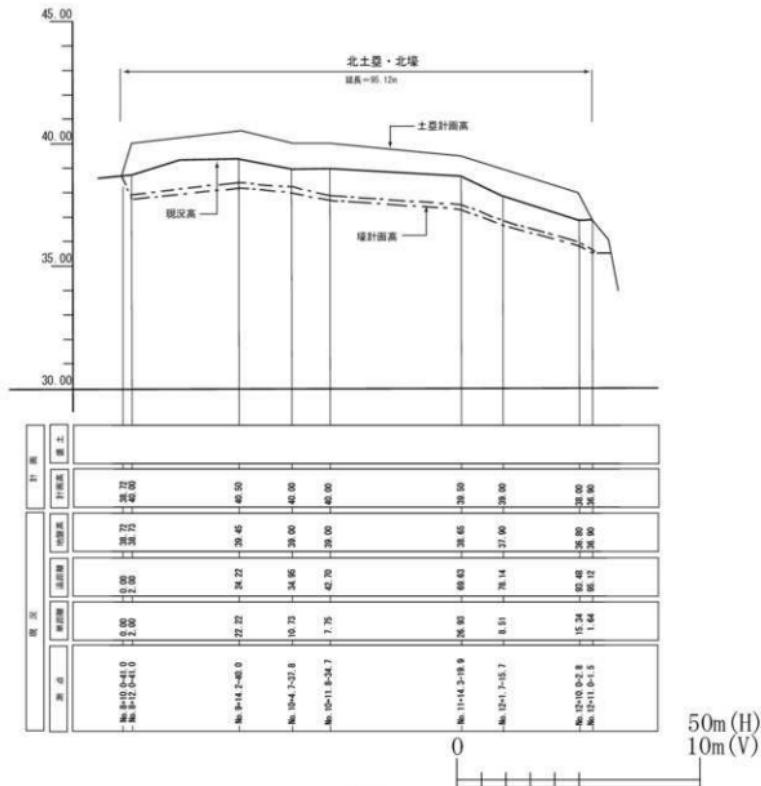
した。また、法面について、土壠は1:1.5、塙は1:2.0を基本として造成した。



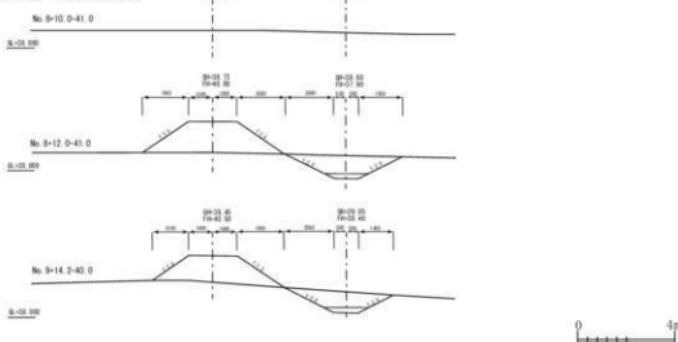
第20図 平成24年度工事対象範囲図



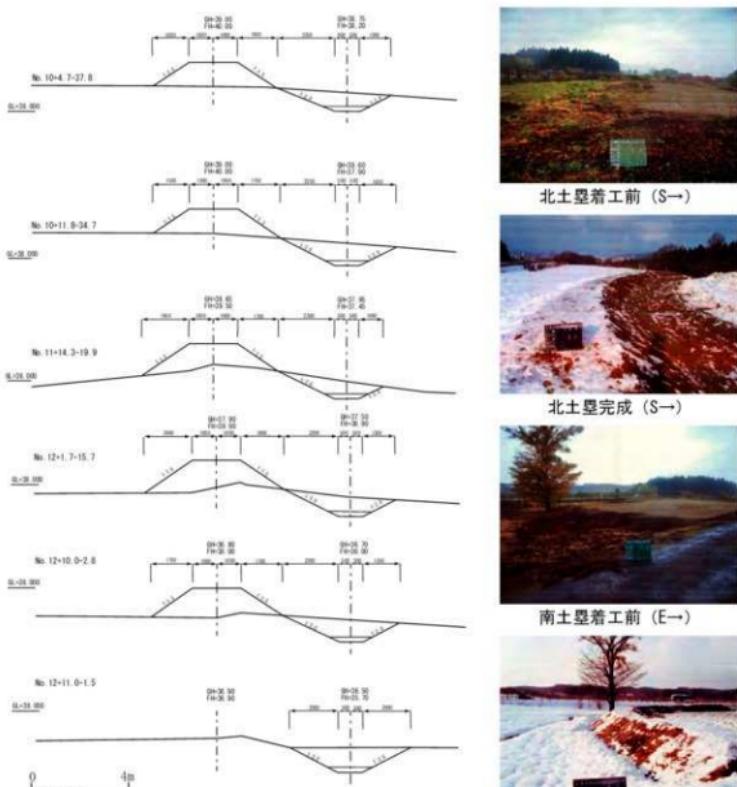
第21図 平成24年度工事設計図①



北土壘・北壕横断図



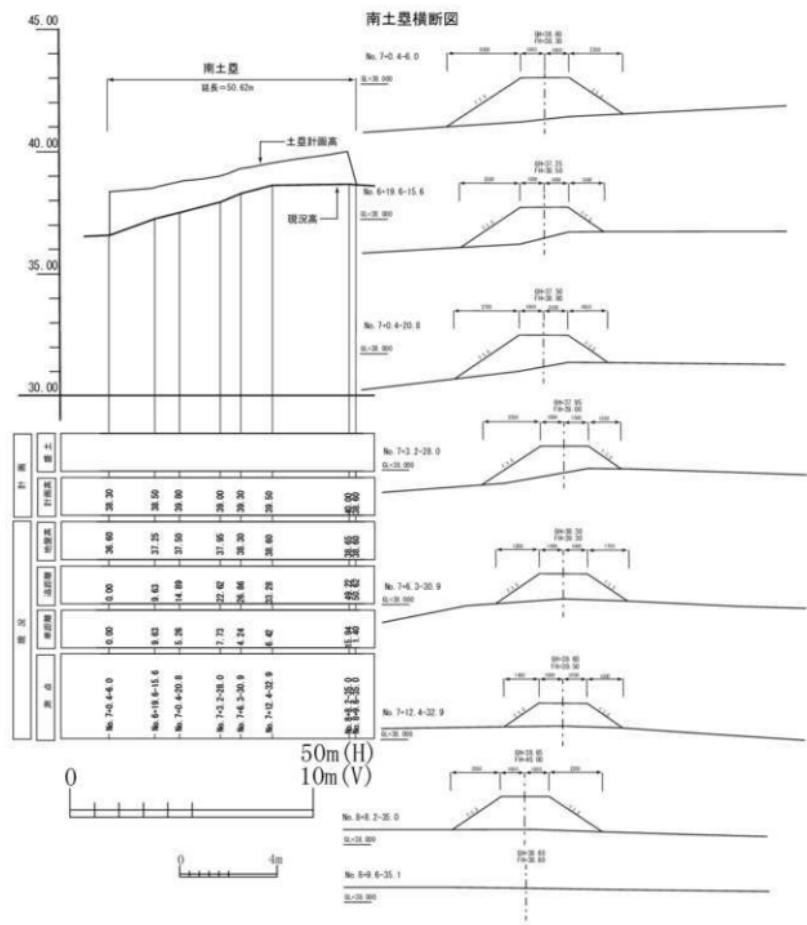
第22図 平成24年度工事設計図②



第23図 平成24年度工事設計図③



写真11 平成24年度工事写真

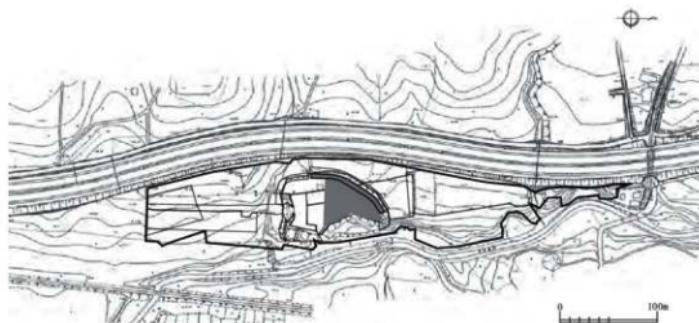


第24図 平成24年度工事設計図(4)

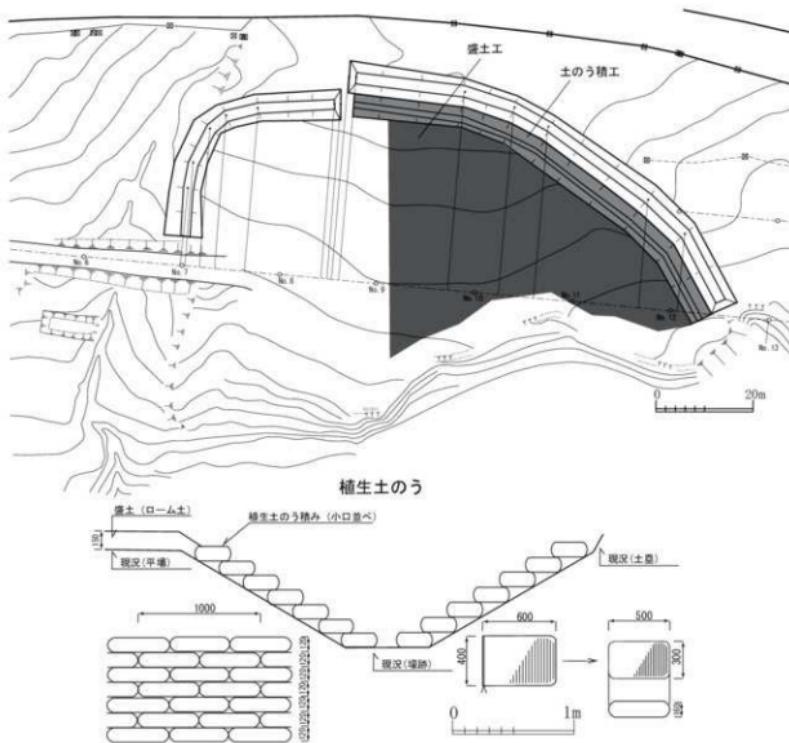
8. 平成25年度

平成24年度に掘削した内郭の北塹 ($L = 95.12\text{ m}$, 253 m^3) を対象に植生土のう積みを行い、また、内郭

の平場 $1,628\text{ m}^2$ を対象に厚さ 15 cm の粘性土の保護盛土工事を実施した。



第25図 平成25年度工事対象範囲図



第26図 平成25年度工事設計図



内郭盛土着工前 (S→)



内郭盛土完成 (S→)



内郭盛土作業状況 (S→)



内郭盛土厚さ測定 (S→)



北塙植生土のう積工着工前 (N→)



北塙植生土のう積工完成 (N→)



植生土のう作成状況

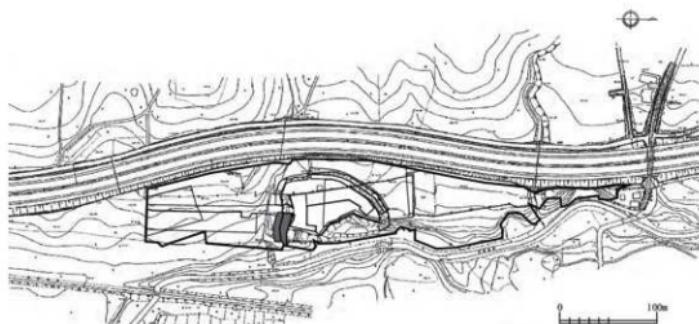


北塙植生土のう積み上げ状況 (S→)

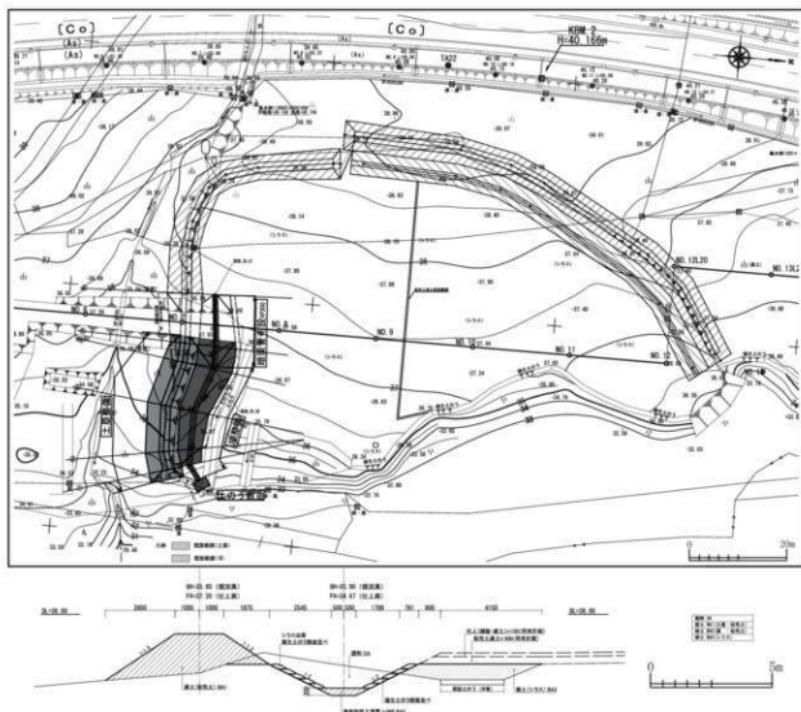
9. 平成26年度

南塙の工事用作業用道路より東側の地区を対象に、
土壠 ($L=30.15\text{ m}$, 162.2 m^2) と塙 ($L=24.81\text{ m}$) の

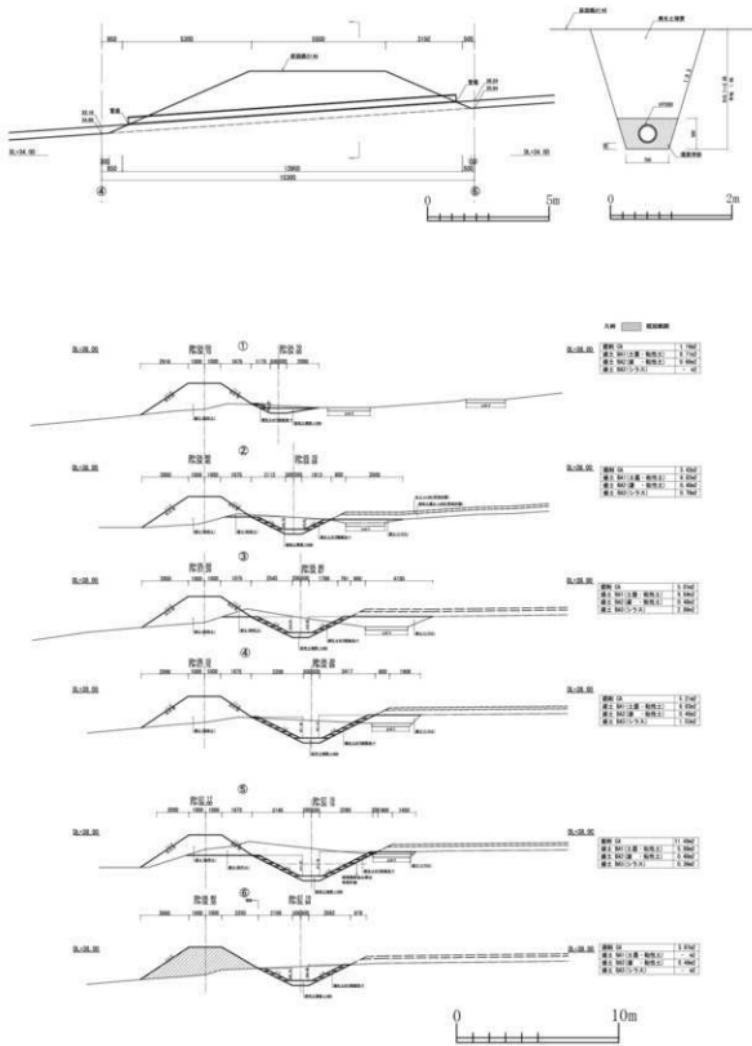
造成工事を実施した。また、VP300の暗渠管 (14 m)
を設置した。



第27図 平成26年度工事対象範囲図



第28図 平成26年度工事設計図①



第29回 平成26年度工事設計図②



土盛盛土着工前 (E→)



土盛盛土完成 (E→)



土盛盛土作業状況 (E→)



土盛盛土作業状況 (E→)



土盛盛土天端計測状況 (E→)



土盛盛土法面計測状況 (E→)



塚完成 (E→)



堀掘削状況 (SE→)

写真13 平成26年度工事写真①



塙底部粘性土敷し状況 (E→)



塙底部粘性土厚さ確認状況 (E→)



植生土のう積上げ状況 (W→)



植生土のう積上げ高さ確認状況 (E→)



暗渠管設置状況 (E→)



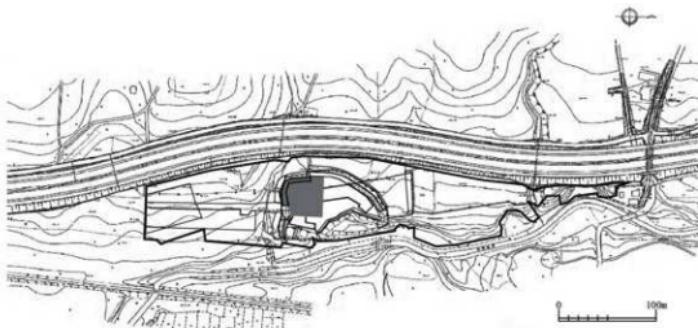
暗渠管設置完成 (NW→)

写真14 平成26年度工事写真②

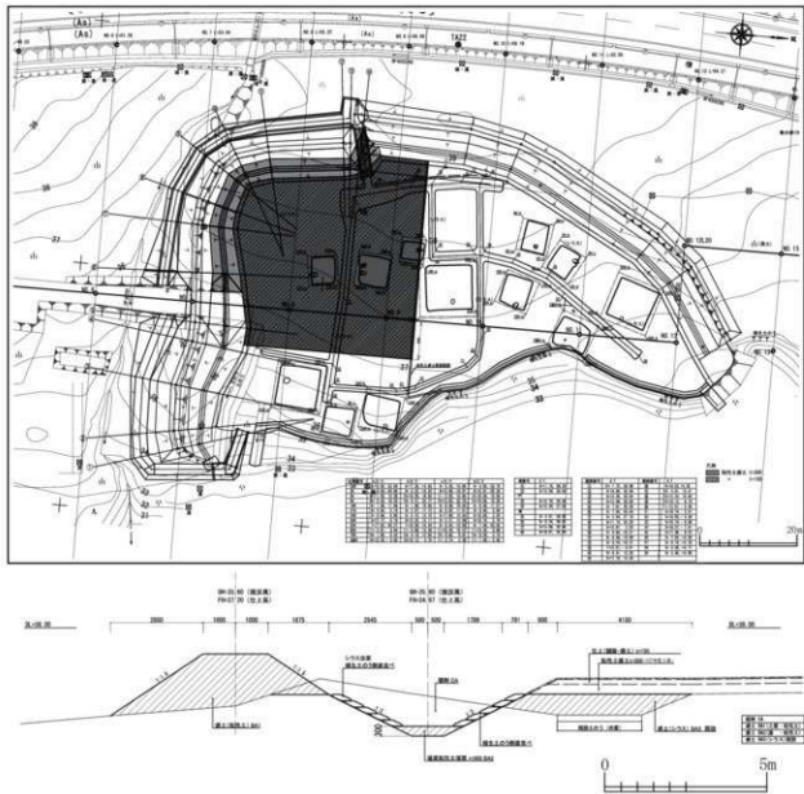
10. 平成27年度

南塙の工事用作業道路より西の塙 (L=43.86 m)
の掘削及び植生土のう積み、内郭平場 1,300 m² の保護

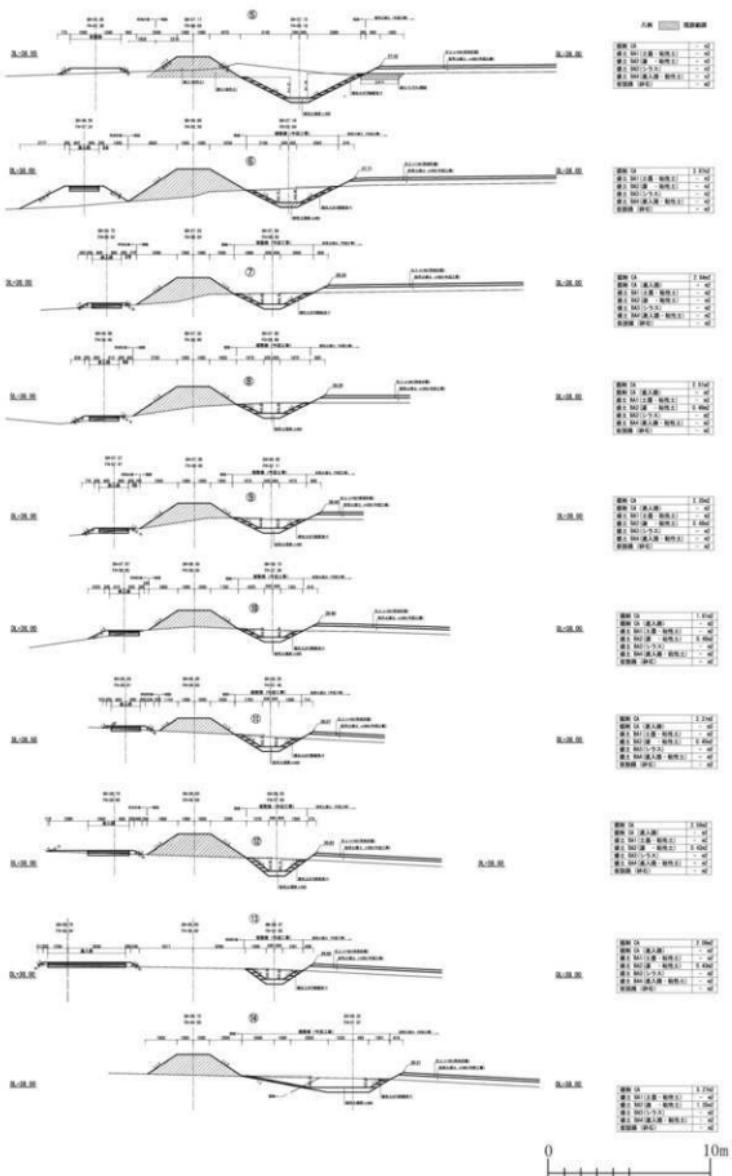
盛土工事 (厚さ t=30cm) を実施した。



第30図 平成27年度工事対象範囲図



第31図 平成27年度工事設計図①



第32図 平成27年度工事設計図②



内郭盛土着工前 (S→)



内郭盛土完成 (S→)



内郭盛土着工前 (N→)



内郭盛土完成 (N→)



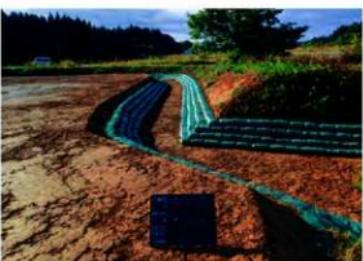
内郭盛土敷均し状況 (W→)



内郭盛土厚さ計測状況 (S→)



堤着工前 (N→)



堤完成 (N→)



塹掘削状況 (S→)



塹底部粘性土敷均し状況 (N→)



塹底部粘性土厚さ確認 (S→)



植生土のう積上げ状況 (E→)



植生土のう高さ確認状況 (S→)

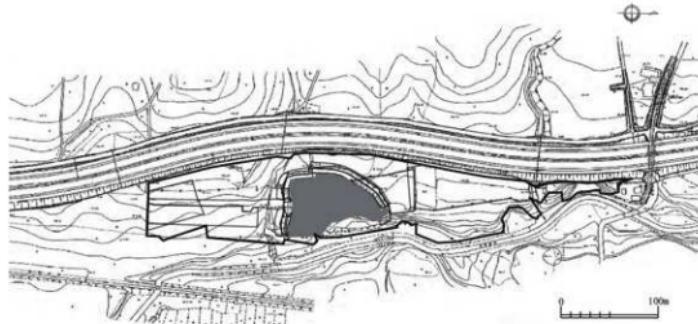


植生土のう積上げ完成 (E→)

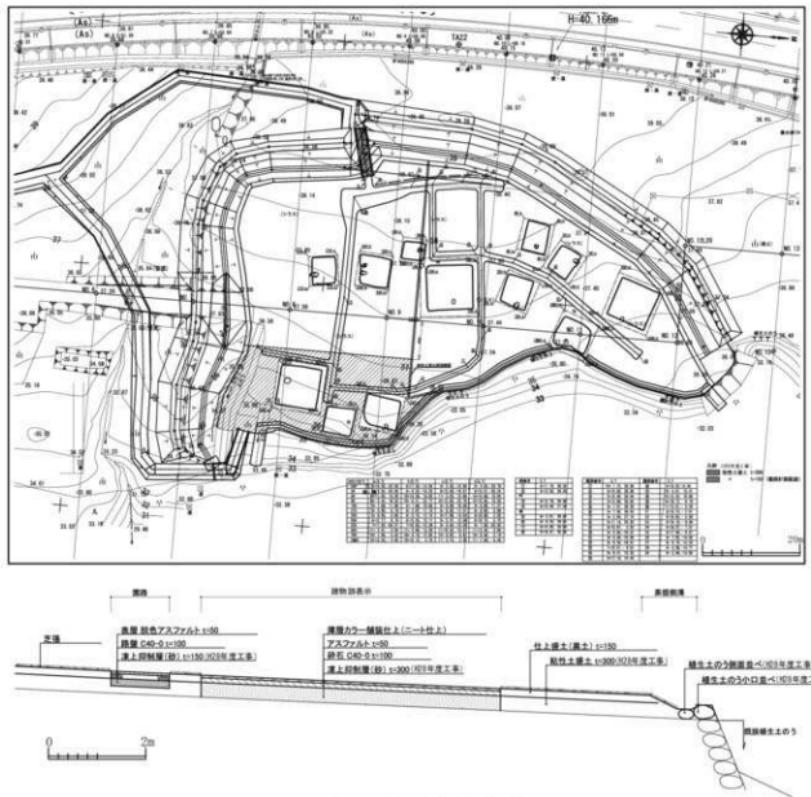
写真16 平成27年度工事写真②

11. 平成28年度

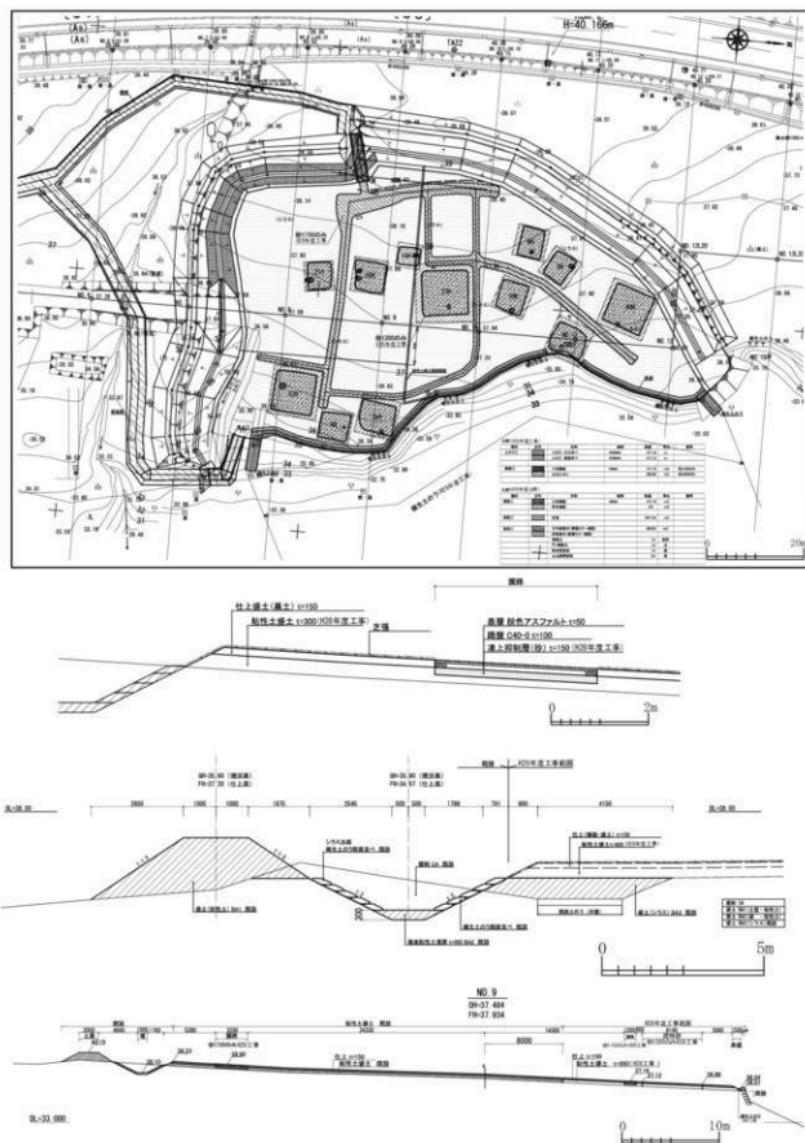
内郭の南東側の保護盛土(厚さ t=30cm)と竪穴建物跡(19H 除く)、園路の凍上抑制層を形成する工事を実施した。



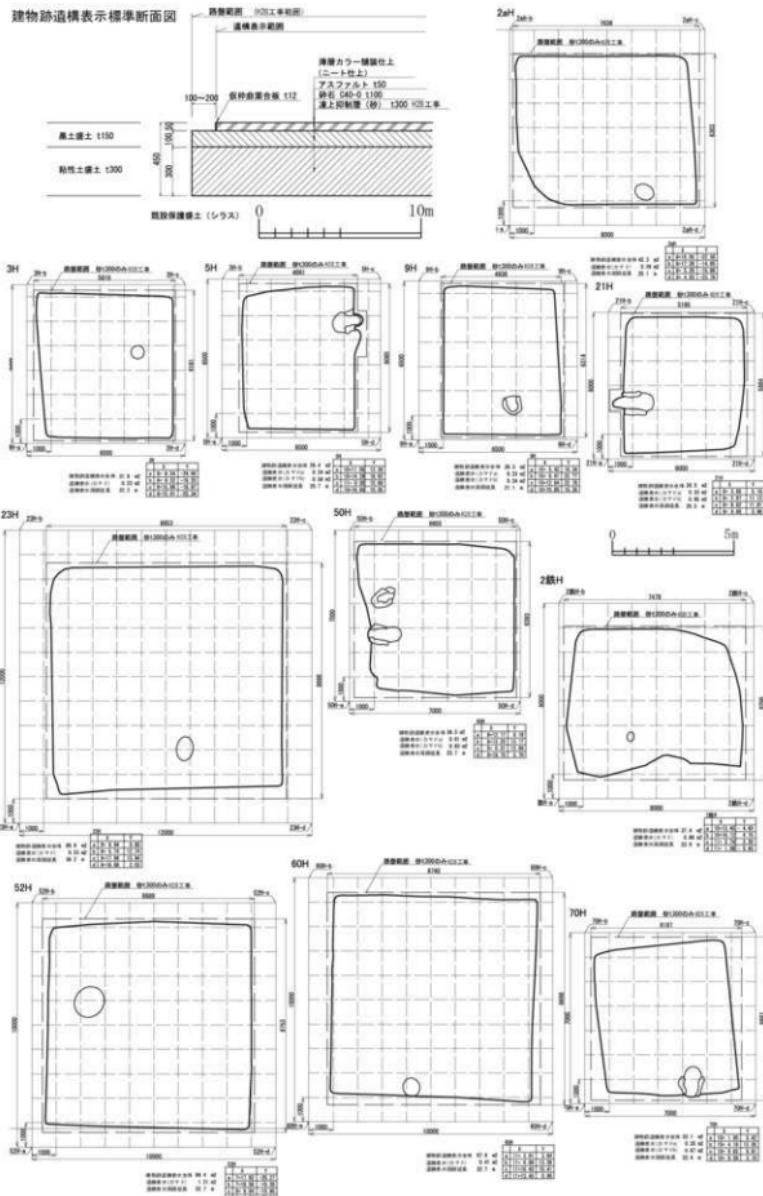
第33図 平成28年度工事対象範囲図



第34図 平成28年度工事設計図①



第35図 平成28年度工事設計図②



第36図 平成28年度工事設計図③

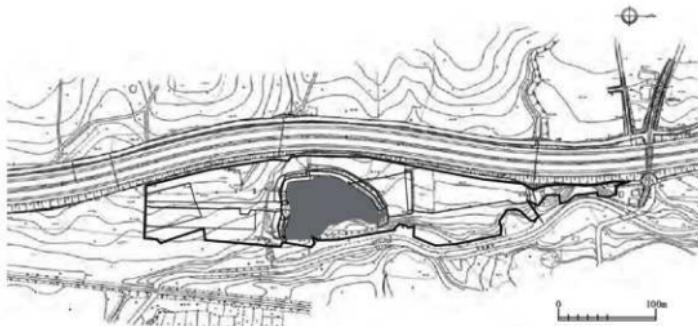


写真17 平成28年度工事写真

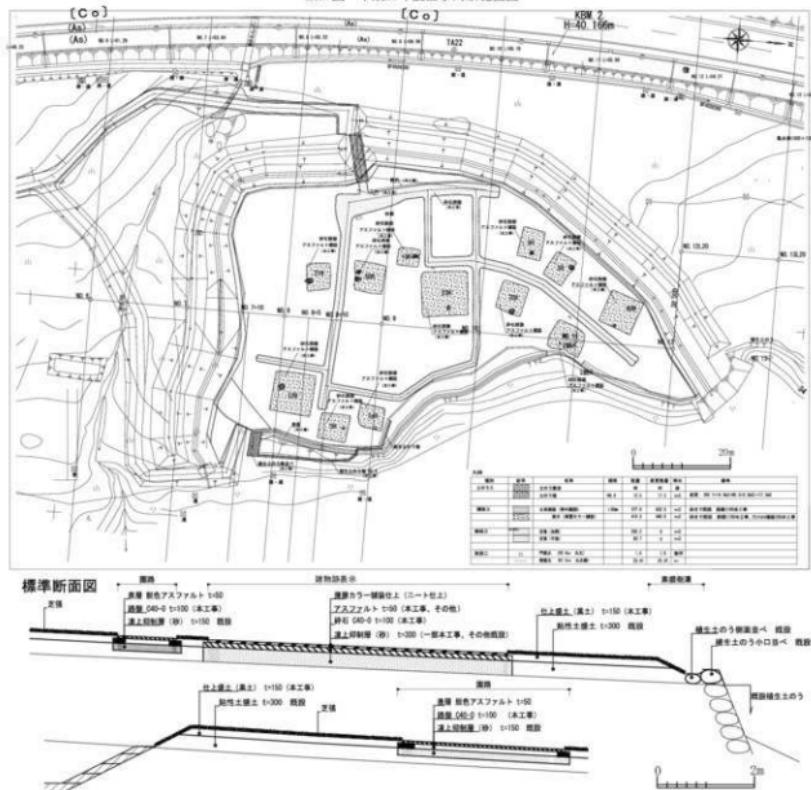
12. 平成29年度

平成28年度に未施工の竖穴建物跡(19戸)の凍上抑制層の形成と竖穴建物跡全棟のアスファルト舗装及

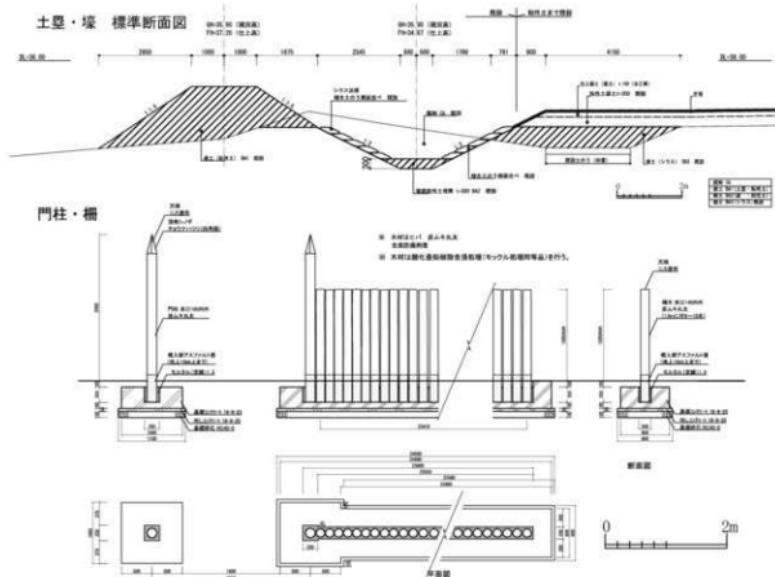
び園路の路盤工事を実施した。また、立体表示として柵列と門の復元工についても実施した。



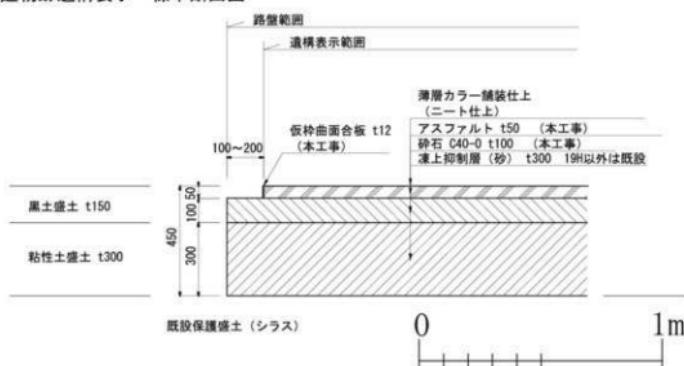
第37図 平成29年度工事対象額図

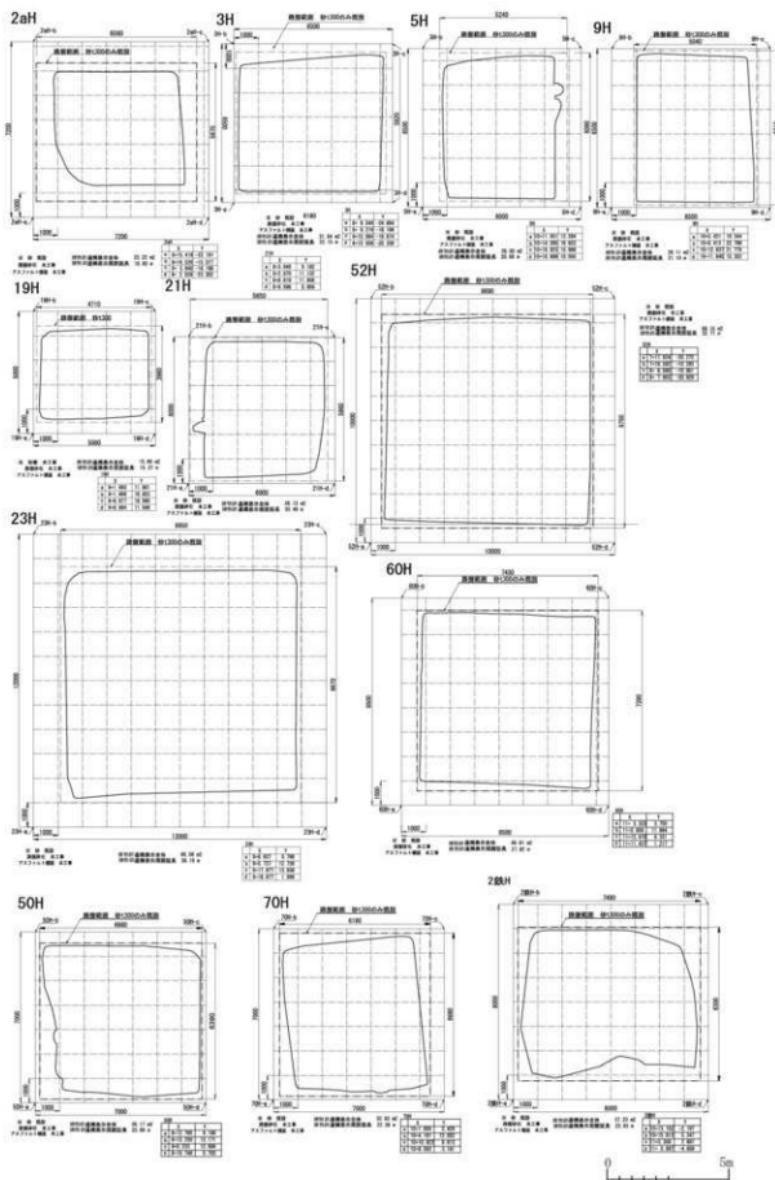


第38回 平成29年度工事設計図①



建物跡構表示 標準断面図





第40図 平成29年度工事設計図③



着工前 (S→)



完成 (S→)



着工前 (SW→)



完成 (SW→)



着工前 (SW→)



完成 (SW→)



法面整形状況 (S→)



黒土敷均し状況 (SW→)



植生土のう積み状況 (S→)



植生土のう積み高さ測定状況 (S→)



植生土のう敷並べ作業状況 (S→)



植生土のう敷並べ完成 (E→)



門・柵列復元工掘削状況 (N→)



門・柵列復元工エコンクリート打設状況 (N→)



門復元工型枠組立状況 (S→)



門・柵列復元工エコンクリート仕上げ状況 (S→)

写真19 平成29年度工事写真②



キシラデコール塗布状況〔1回目〕 (N→)



基部アスファルト塗布状況 (W→)



門復元工工込状況 (E→)



門・柵列復元工モルタル仕上げ状況 (N→)



キシラデコール塗布状況〔2回目〕 (S→)



天端部ニス塗布状況 (E→)



園路舗装路盤工碎石敷均し状況 (S→)



園路舗装路盤工出来高測定状況 (W→)



建物跡表示人力掘削状況〔19H〕 (E→)



建物跡表示凍上抑制層転圧状況〔19H〕 (E→)



建物跡表示碎石敷均し状況〔23H〕 (SW→)



建物跡表示型枠組立状況〔23H〕 (E→)



建物跡表示舗装状況〔23H〕 (E→)



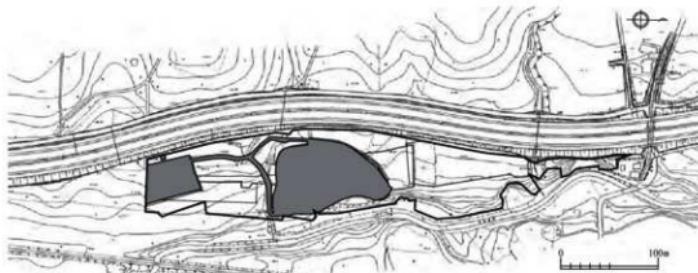
建物跡表示仮枠コンクリート撤去状況〔23H〕 (SW→)

写真21 平成29年度工事写真④

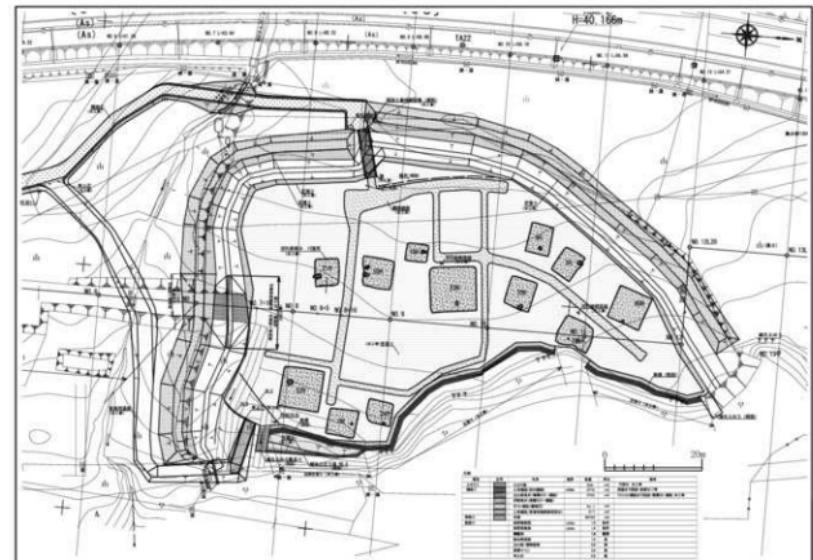
13. 平成30年度

平成29年度に実施した竖穴建物跡のアスファルト舗装上に薄層カラー舗装を施し、カマド位置の表示を

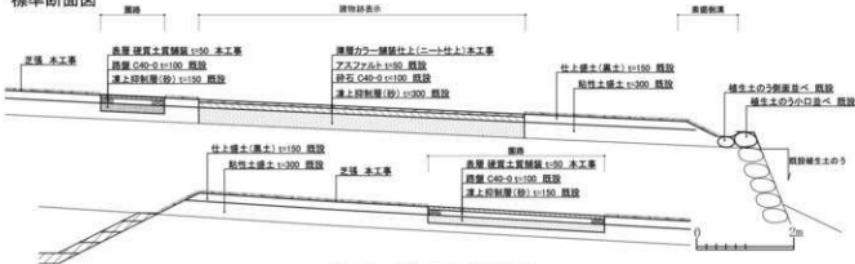
実施した。また、園路については、土系の硬質土質舗装(カラーサンド)及びダスト舗装を表層に実施し



第41回 平成30年度工事対象範囲図



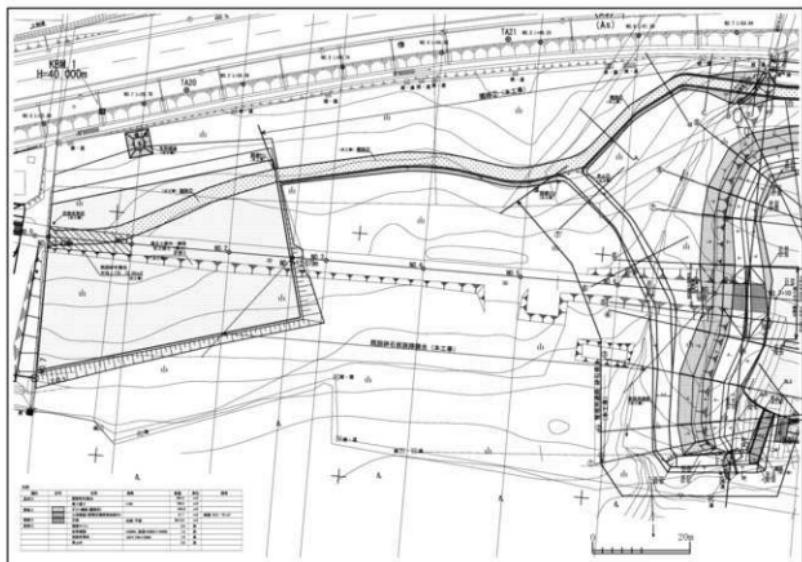
標準断面図



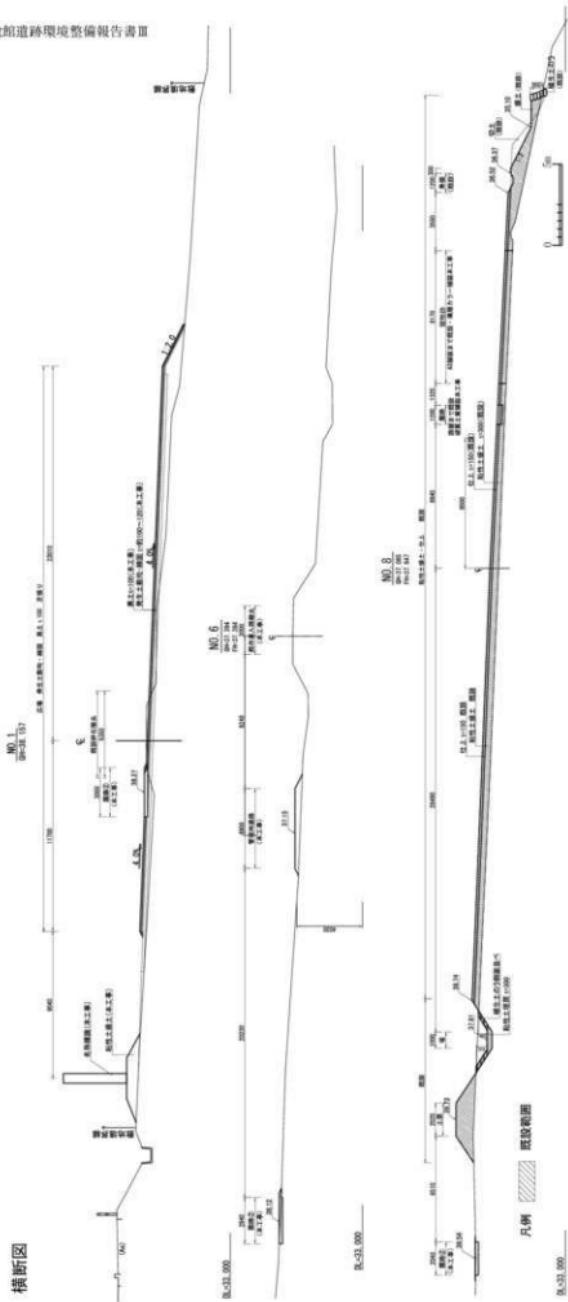
第42図 平成30年度工事設計図①

た。その他、橋復元工を西侧の1箇所実施し、遺跡解説板1基、遺構解説板3基、誘導板3基を設置した。また、内郭及び史跡南側の広場部分に芝張を実施し、国土交通省が整備する簡易バーキングに近接する史跡南端部分に史跡名称柱1基、国道7号浪岡

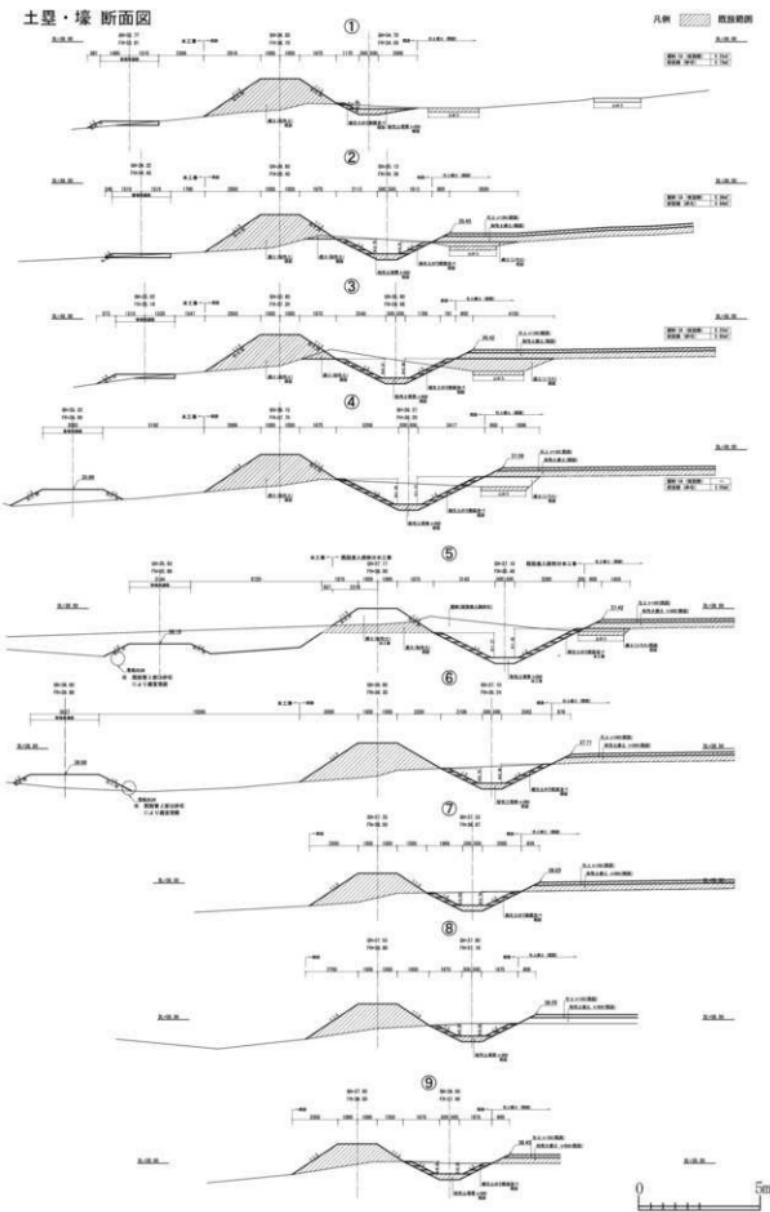
バイパスに近接する位置に史跡名称標識1基を設置した。平成17・18年度に造成した仮設道路について、現況地形を優先する形で除却し、園路から分岐する管理用道路を新設した。



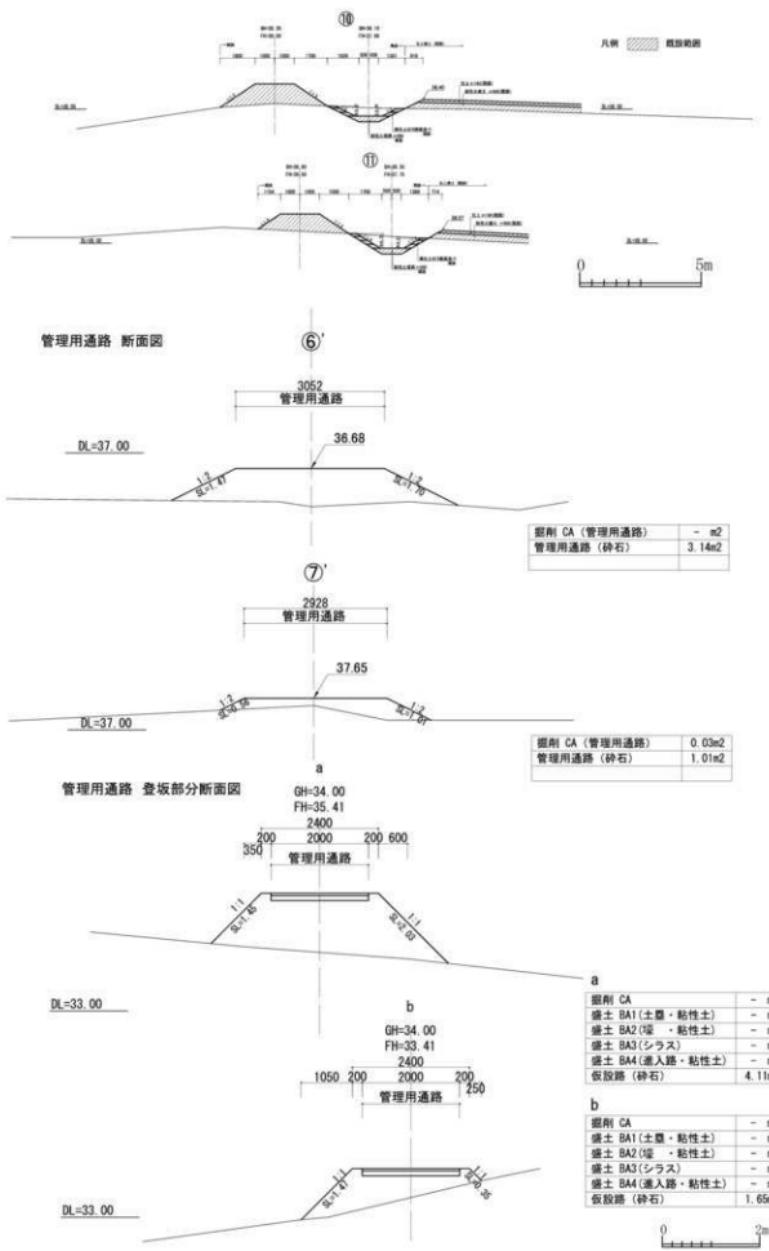
第43図 平成30年度工事設計図②



第44回 平成30年度工事設計図③

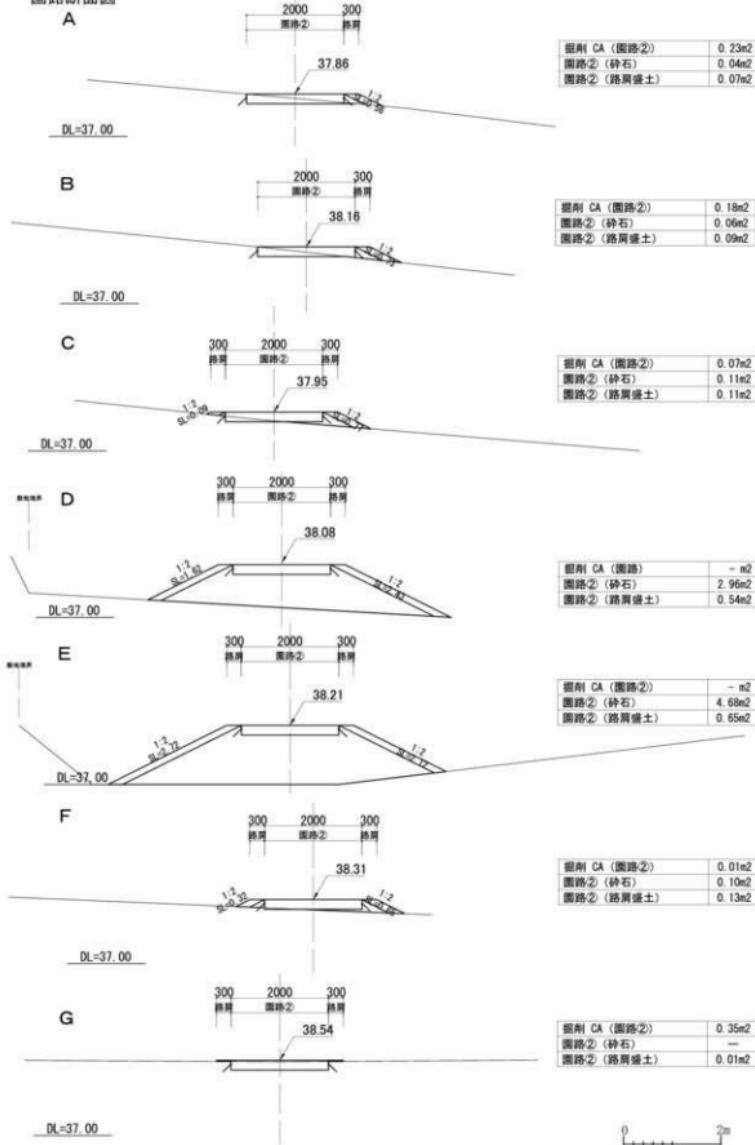


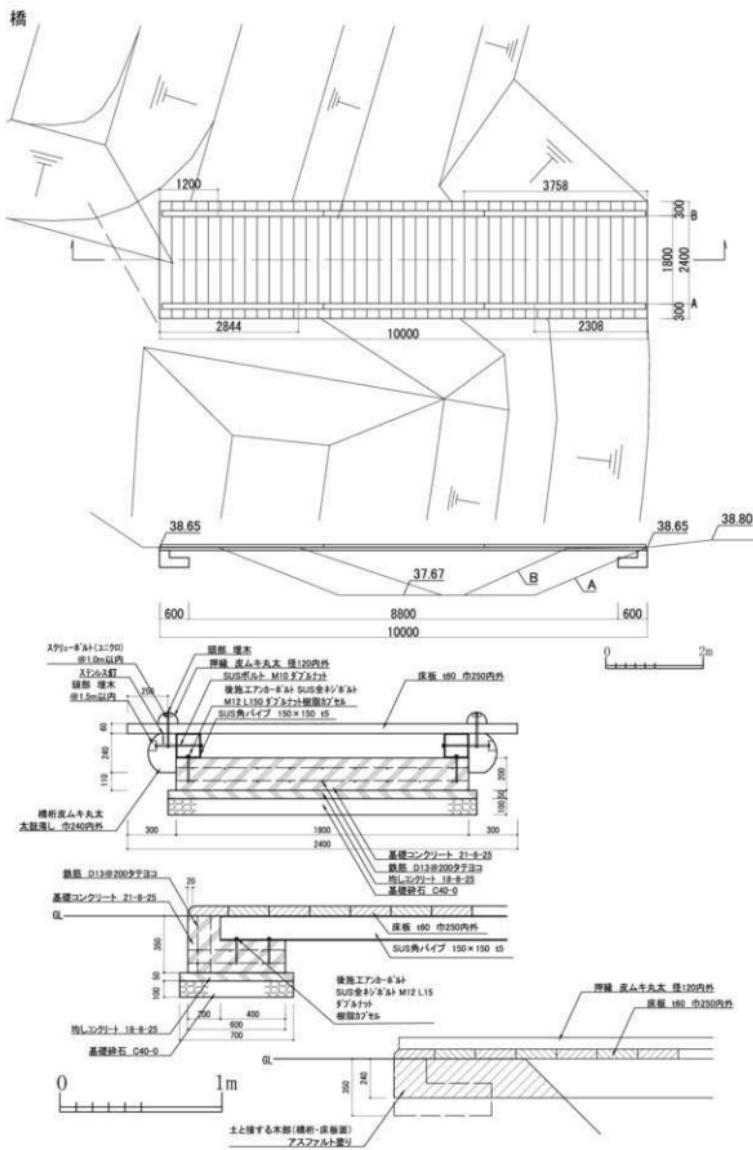
第45図 平成30年度工事設計図④



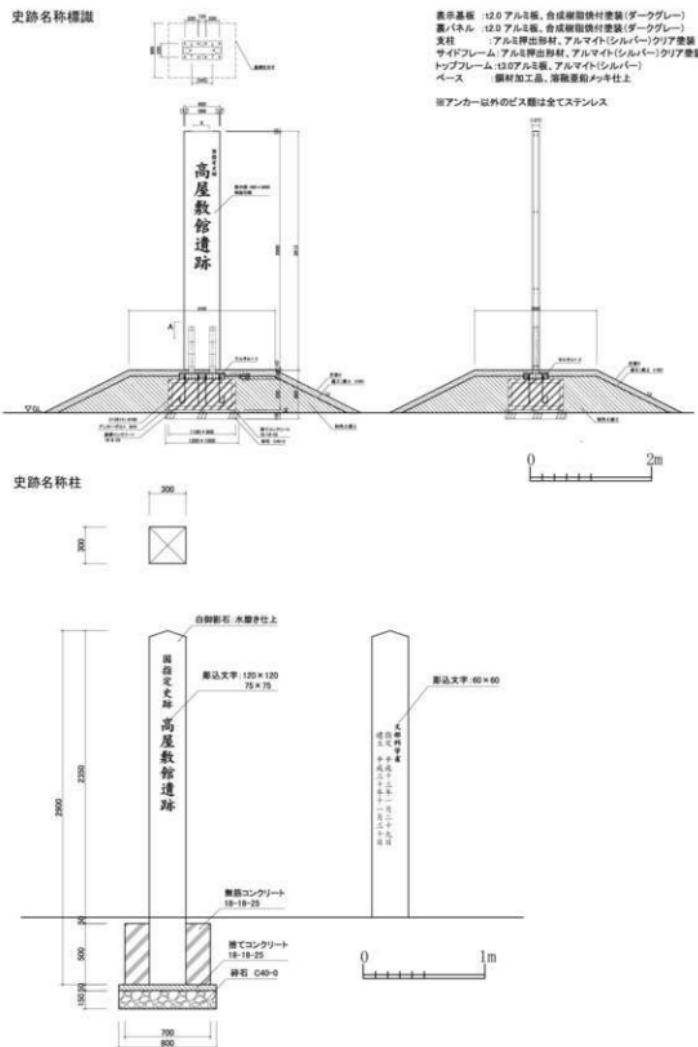
第46回 平成30年度工事設計図⑤

園路断面図

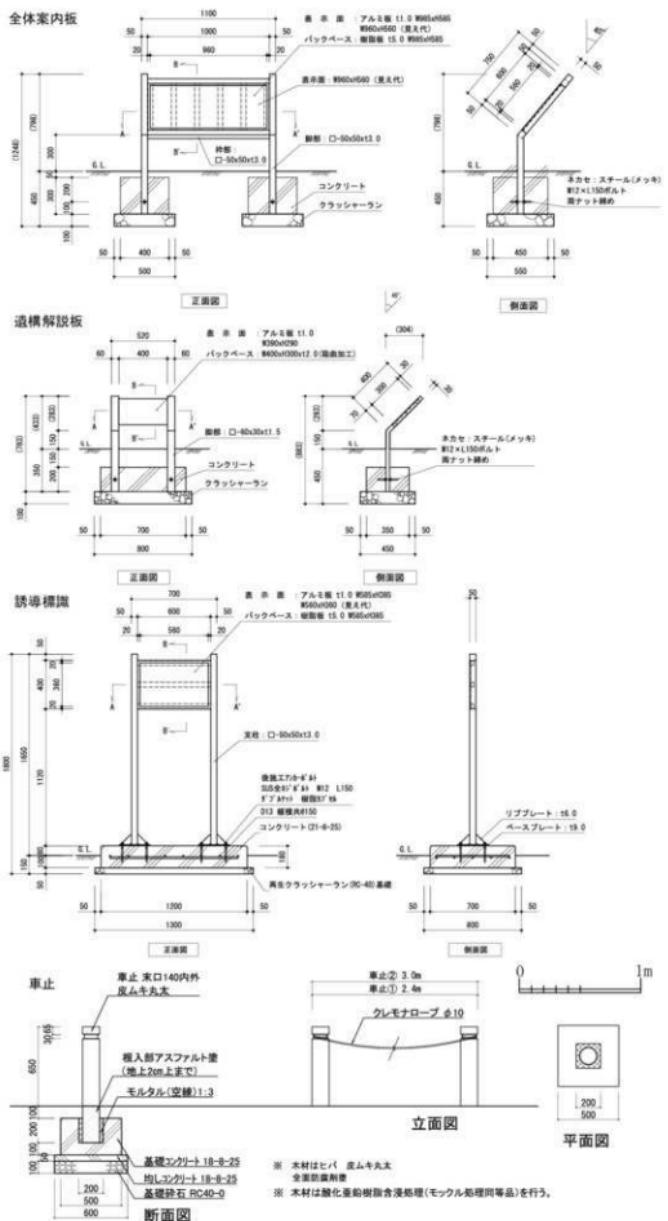




第48図 平成30年度工事設計図⑦



第49回 平成30年度工事設計図⑧



第50図 平成30年度工事設計図⑨



着工前 (S→)



完成 (S→)



着工前 (E→)



完成 (E→)



着工前 (S→)



完成 (S→)



着工前 (S→)



完成 (S→)

写真22 平成30年度工事写真①



園路基面整正作業 (E→)



園路型枠設置寸法測定 (N→)



園路舗装作業状況 (S→)



園路舗装仕上状況 (S→)



園路舗装出来高測定状況 (E→)



園路舗装厚さ確認状況 (S→)



管理用通路碎石盛土敷均し・転圧状況 (N→)



管理用通路完成 (N→)



法面（土壌）下草除去状況（W→）



法面（土壌）芝張状況（W→）



平場耕耘作業状況（S→）



平場芝張作業状況（E→）



旧作業用仮設道路（塙）既設排水管撤去状況（N→）



旧作業用仮設道路（塙）植生土のう設置状況（W→）



建物跡平面表示薄層カラー舗装作業状況（SE→）



建物跡平面表示薄層カラー舗装作業状況（E→）



橋基礎掘削状況 (N→)



橋基礎コンクリート打設状況 (N→)



橋基礎コンクリート出来形測定状況 (N→)



橋完成 (W→)



遺構説明板基礎コンクリート出来形測定状況 (W→)



全体案内板完成 (W→)



史跡名称標識完成 (N→)



史跡名称柱完成 (S→)

第三章

高屋敷館遺跡は、平成6・7年度に国道7号浪岡バイパス建設事業に先立つ発掘調査が青森県埋蔵文化財調査センターにより実施され、報告書は平成10年3月に刊行されている（青森県教育委員会1998）。その後、遺跡の重要性から保存が決定され、平成13年1月に国史跡指定された。また、バイパスは、西側を迂回するルートが設定された（浪岡町教育委員会2001）。迂回ルートは、野尻(3)遺跡及び山元(1)遺跡を通る形であったが、平成17年度に刊行された報告書では、「高屋敷館遺跡III」として調査・報告されている（青森県教育委員会2005）。また、さらに北側の迂回ルートの接続部分について、「野尻(3)遺跡II」として調査・報告されている（青森県教育委員会2006）。

高屋敷館遺跡の調査結果を契機に、三浦圭介氏を中心として、いわゆる「防衛性集落論」が高まり、平成17年には蝦夷研究会の青森大会において論の成果が集約され、翌年刊行された『北の防衛性集落と激動の時代』にまとめられている（三浦・小口・齊藤2006）。

「防衛性集落論」については異論があり、結界と評する論（工藤1997）や、「囲郭集落」と呼称する論（八木2011）も存在する。八戸市林ノ前遺跡の成果（青森県教育委員会2006ほか）や、新田(1)遺跡をはじめとする石江遺跡群の成果（青森市教育委員会2014ほか）などでも慎重な取扱いがなされていたが、近年、青森県外ヶ浜町山本遺跡の測量成果を基

資料編

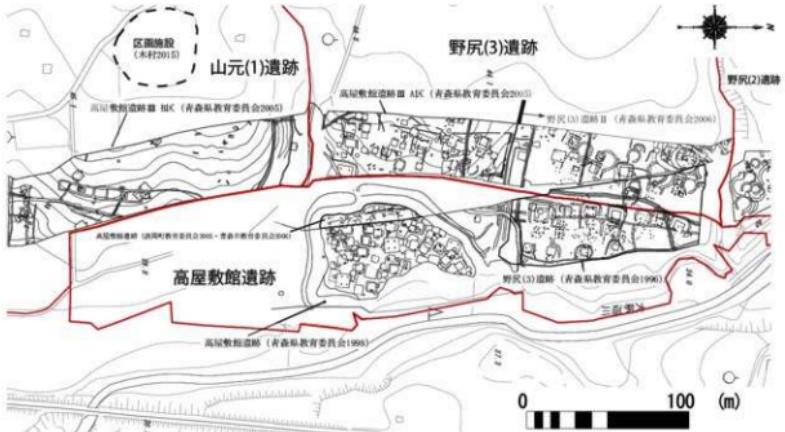
に、三重の塹と土塁が伴う集落が想定され¹¹（関根2017）。防衛性に関する認識が再び強まり、平成30年に刊行された『青森県史通史編I』でも防衛性集落としての項が設けられ、高屋敷館遺跡は防衛性集落の代表遺跡として取り扱われている¹²（青森県2018）。

その他、筆者が確認・報告した山元(1)遺跡内にある、土塁と塹を持つと想定される方形区画施設（木村2015）は、発掘調査が未実施ではあるが、巻首図版2下段の写真のとおり、高屋敷館遺跡の土塁や柵列より高い位置から視認可能な場所にあり、地元民が「高屋敷」と呼ぶ本来の場所として蓋然性が高いものと思われる¹³。

平成6・7年度の発掘調査における調査資料は、発掘調査担当機関であった青森県埋蔵文化財調査センターが長らく保存・管理してきたが、史跡整備が進行し、事業の最終年度が平成30年度と確定した平成28年度に譲与を受けた。

譲与資料のうち、出土遺物について確認したところ、非掲載資料の中に、羽釜や墨書き土器・刻畫土器・擦文土器等が含まれることが判明し、作図・計量等資料化した。

また、平成10年に報告された橋脚の年輪年代測定の結果についても、酸素同位体を併せた年輪年代測定法によって精度の高い研究が行われていることから、再分析を依頼した。これらの成果について本章で報告し、整備の内容に反映させることとした。



第51図 高屋敷館遺跡及び周辺遺跡の遺構配置図

註

1) その他の、法政大学教授小口雅史氏らが行った三次元レーザー測量の成果が一般社団法人日本考古学会2016年度弘前大会の小口氏の講演で紹介されている。青森県史跡編1の本文については、これらの成果を基にした記述がみられる。

三次元レーザー測量のようなリモートセンシングや踏査に伴う測量は、考古学的調査における調査戦略(Research strategy)を形成する上で重要な役割を果すものであると専門の概説書でも紹介されているが、併せてそのデータの信頼性や精度をチェック確認する唯一の方法は、発掘調査であることが述べられている(Benfara & Rahm 1991)。

確かに山本道路では古代の集落跡、土塁、塙跡といいつゆる「防衛性集落」の構成要素が存在し、古代を主体とする遺物が出土したことから、防衛性集落論を強く推す学者もいるが、それも知らない訳ではない。しかしながら、現時点では周辺に幹線建設に伴う外周の確定的な部分に留まり(青森県教育委員会2005ほか)、塙、土塁内の主体部や三重塙の外側に確認された堅穴建物群との関連を把握する調査はなされていない。

開拓の論文の中にも触れていたが、集落の複雑な構成構造が現状では古代集落の中に明確な類例がないことや、遺構の時期差および中間に改変されている要素が多いか検討を要するという記述は、青森県野辺地町向田(35)遺跡で北型の防衛性集落の主体部とされる地点の溝跡(第36号住居跡抜引)から中世陶器が出土した事例(青森市教育委員会2014)や高屋敷館遺跡で遺物がほとんど伴わないので、現地で土器利用が行われたことをも通る話であり、看過できない重要な点である。「青森県史跡編1」において山本道路を古代の三重塙の防衛性集落とする取扱いについて、十分な発掘調査による検証がなされていない現時点では、あくまでも仮説としての城を覗しないものであり、位置づけについて、検証するための適切な発掘調査(必要最小限という意味ではなく、情報を整理した上で、検討内容をしっかり明解するような調査実施)を経た後に評価すべきものと考える。

なお、古代における三重塙が検出した事例として、油田(1)遺跡の事例がある(前払市教育委員会2010)。しかしその内容は、部分的に検出された事例、かつ溝の土堆堆积層に掘り返しの痕跡が見られ、同時性が保証されない要素が含まれる。溝出土試料の年代値は1世紀前~12世紀中葉の結果で、出土遺物は古代中心ではあるものの、「防衛性集落」の時期より下った時期となる可能性が高い。2) 前掲図1) 用語として弥生時代と同様の「濠」が用いられているが、「堀」や「塙」などの用語との取扱いに関する定義は凡例中に取り上げられていない。また、野尻(4)遺跡と山元(1)遺跡の中にある区画施設について高屋敷館遺跡の前段として捉えているが、野尻(4)遺跡(青森県教育委員会1990)の塙跡について山元(1)塙跡より新しいとされる前の外周溝(196溝)が確定的な検出・記述に留まり、196溝の西側の塙跡上の部分に同規模の溝状の掘り込みがあり、その掘り込みは、塙に連なる122溝に連絡する位置關係にある。(北側にある同規格かつ塙外に延びる161溝(配置図上では112溝)は、第V-6-(1)-28Eラインの土塁記録上は触れられていないが、第2・7・8層が実質相当し、B-Eラインと近接したレベル(水準基準の記述がないので相対的な比較による)にある)。112溝と122溝は新旧関係が存在しながらも、近接した時期での使用が想

定される。このことから196溝について、外周溝ではなく後代の溝であった可能性がある。あくまでも記録保存資料の発掘調査報告書という公表資料を基にした判断ではあるが、その場合、野尻(4)遺跡検出の塙は、外周溝の伴う建物群よりも後代に遡る可能性が出てくることとなり、高屋敷館遺跡の前段階の資料と必ずしも言い切れない恐れがある。同様に、山元(1)遺跡検出の方形の二重塙(青森県教育委員会2005)の出土遺物は古代主体であるが、10世紀中葉以降とされる堅穴建物跡を切った溝で、切られた堅穴建物跡からの流れ込み等を含めた評価が必要となり、前段とは言い切れない要素がある。

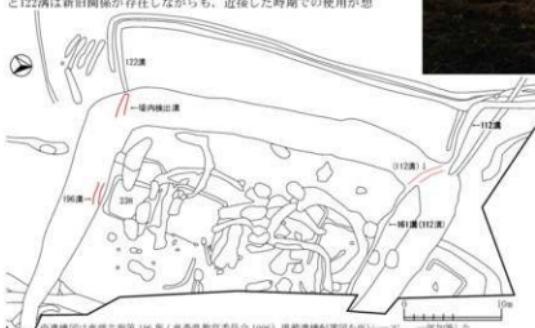
3) 方形区画に関する報告(木村2015)で触れているが、周辺の土地所有者の話によると、方形区画のある場所は、町会の共有地として伝承して利用されていたとのことで、周辺の地点より最も標高が高く「高屋敷」という地名の基になったという話であった。

高屋敷館遺跡の遺跡分布に関する報告は、毎刊報告書(青理文報第23集)第1章第4節中で触れられており、その内容は、現在高屋敷館遺跡として取り扱われている遺跡は『青森県の世城館』(青森県教育委員会1983)で、「野尻館」として登録されている場所に相当し、高屋敷館遺跡は昭和30年の分布調査の際、別な場所(1km北に位置)の遺跡について登録され、昭和59年に国道7号浪岡バイパス浪岡町の青森県教育委員会による分布調査の結果、高屋敷館遺跡の場所に誤りがあることと、「野尻館」が本遺跡に該当することが確認され、野尻館が削除されて高屋敷館遺跡として登録されたということである(青森県教育委員会1998)。青森県における理文文化財登録地名が大字・小字を基に登録されている背景があるため、高屋敷館遺跡として登録。史跡指定まで至ったのは事実であるが、遺跡そのものの実態は、9世紀代から続く野尻遺跡南端にある古代最終施設としての「野尻館」の位置づけの方が妥当である。

なお、山元(1)遺跡内の方形区画からは見下ろす位置に高屋敷館遺跡は所在しているが、高屋敷館遺跡の南側は沢が一本入り、方形区画から延びる低い緩やかな丘陵が広がっている。土壠より南側の丘陵から内郭側を見ると真写真を写真26として掲載したが、内部地表面と土壠の天場の面の高さがほぼ同一である状態である。保護のため内側は塗土がされ、当時の地表面よりも若干高い状況ではあるが、発掘調査で南側のエアラに柵列が内郭や土壠天場に確認されていないことを考えると丸見えの状況であったと想定される。外側から土壠を越え侵入し、そのまま5m近く落差の塙に落ちることがある場合は「防衛」と言えるのかもしれないが、周辺から中の状態は認認しやすく、かつ弓矢など外からの攻撃が容易である。



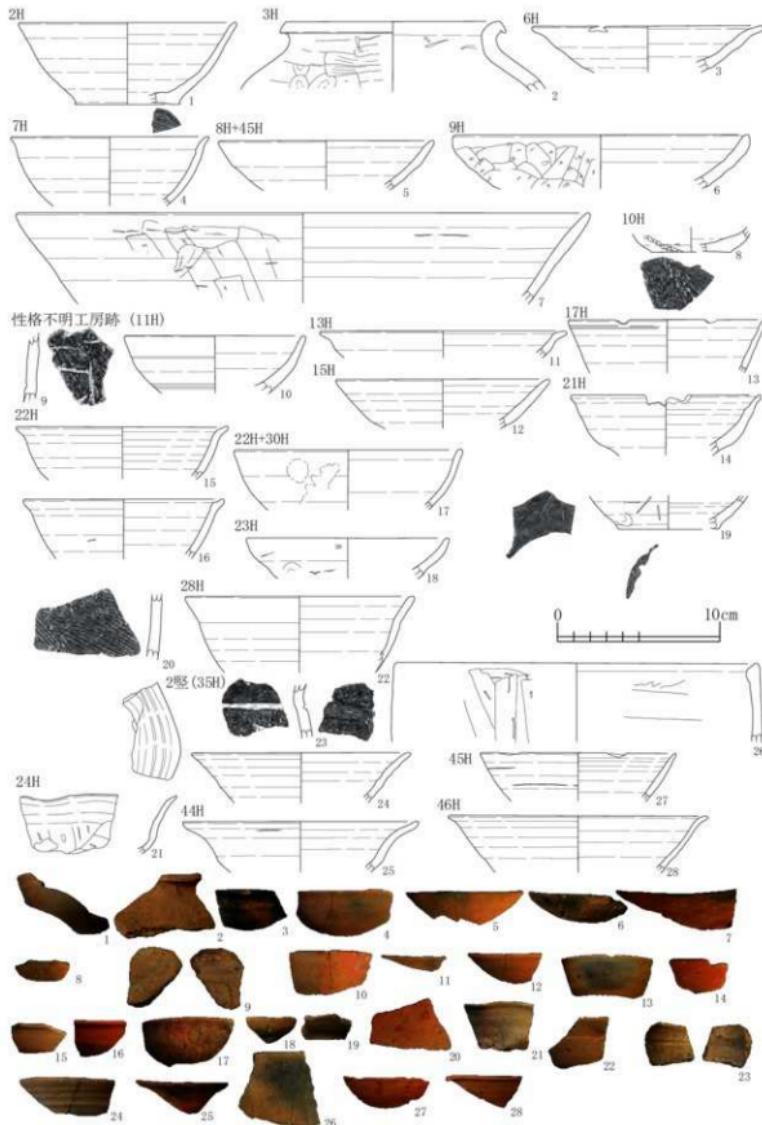
写真26 (参考) 高屋敷館遺跡南側から内郭側を望む



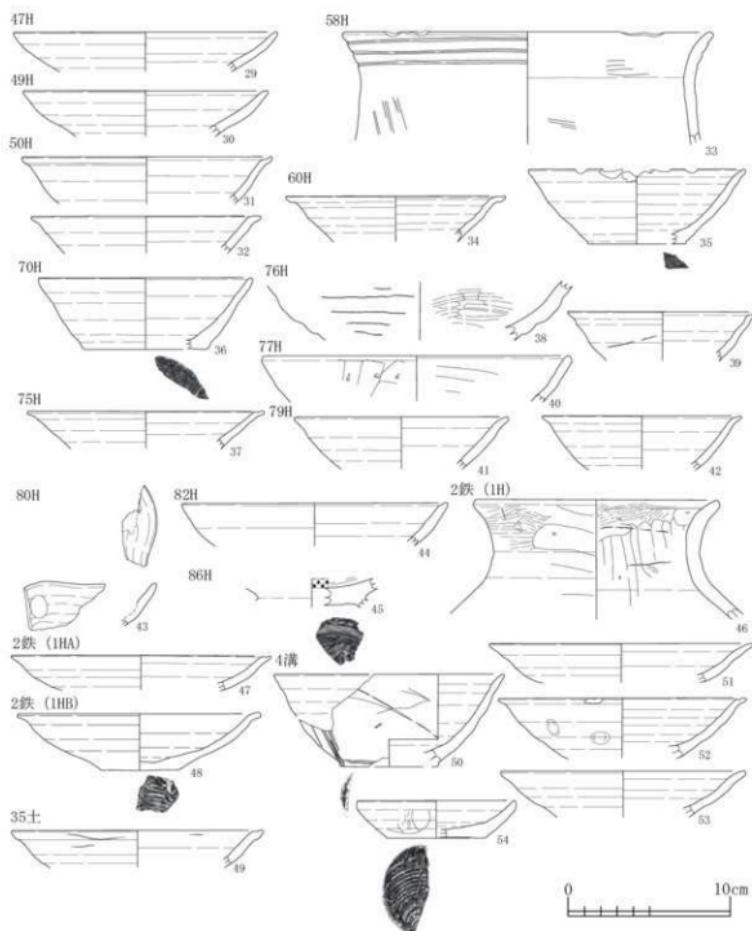
第1節 高屋敷館遺跡出土土器

127点図示した。土師器中心の構成ではあるが、須恵器(89)、撻文土器(20・33・62・70)も含ま

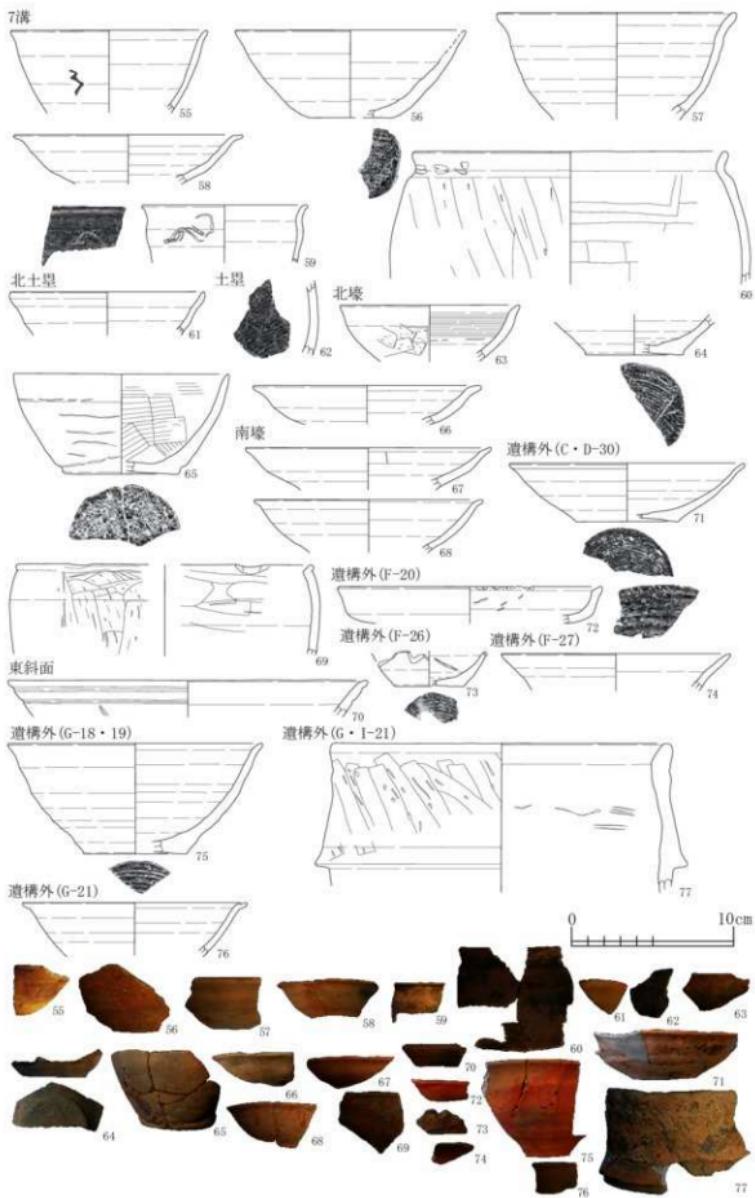
れる。土師器のうち、第2号竪穴造構(第35号住居跡)下土坑出土の23は、外面の頸部に沈線による区



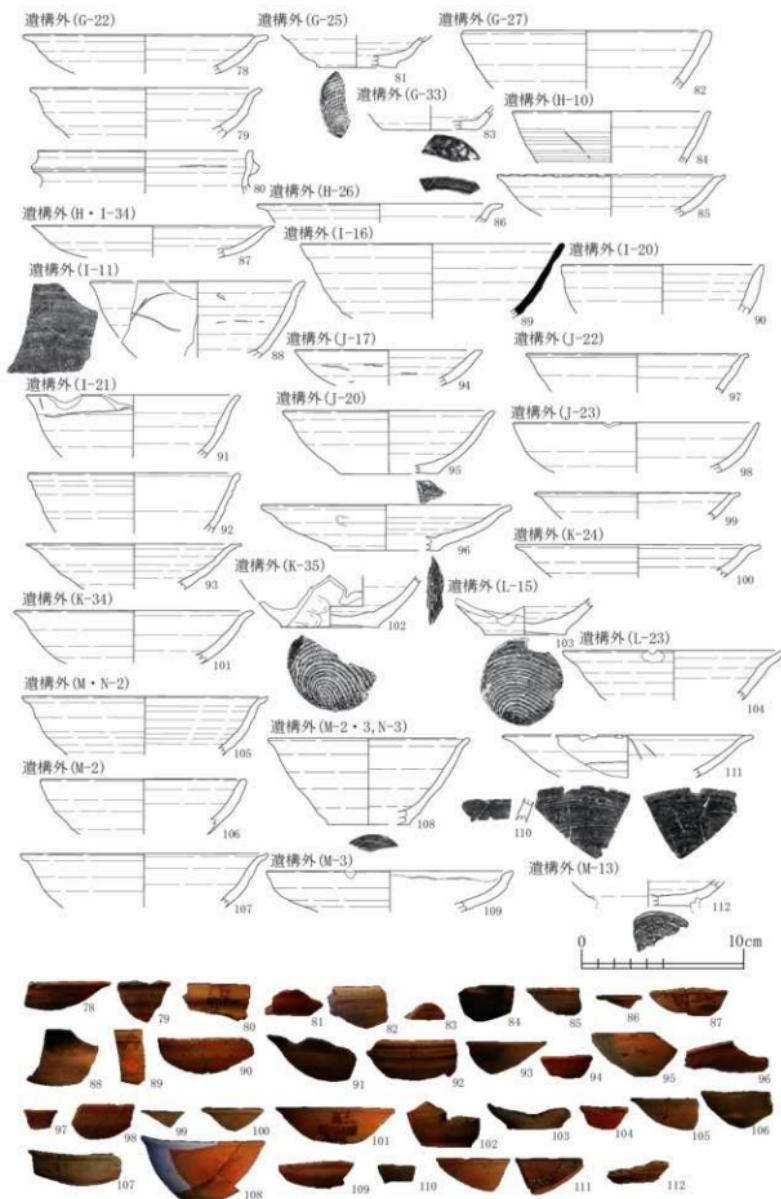
第53図・写真27 追加資料①



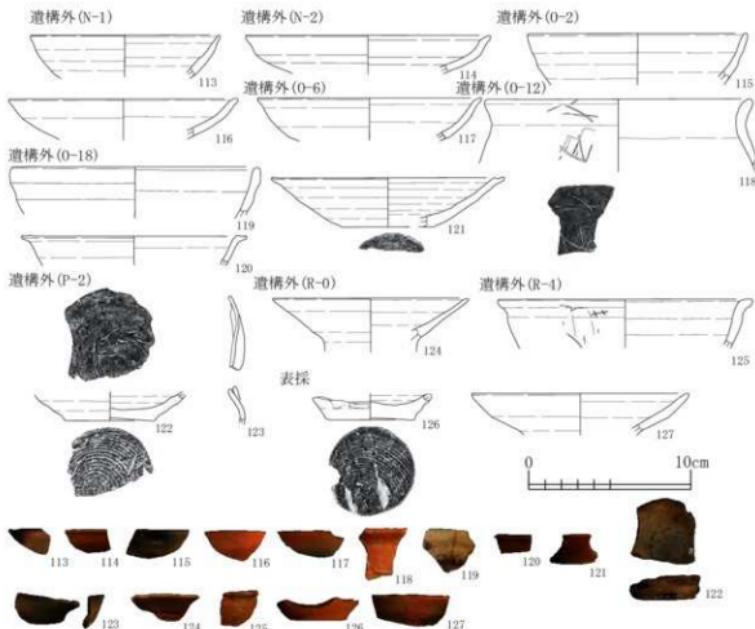
第54図・写真28　追加資料②



第55図・写真29 追加資料③



第56図・写真30 追加資料④



第57図・写真31　追加資料⑤

第2表 高麗數館遺跡出土土器觀察表(1)

第3表 高屋敷館遺跡出土土器観察表②

資料番号	年代	出土地点	種類	形態	寸法	地質	地層	性質	堆積物	遺跡名	年	測定値	測定者	内面調査	外側調査	内面色調	外側色調	参考文献	備考
30	12世紀後葉	土壌	土器	縦縫	14.7 × 9.3	砂質	砂質	粘土	無	未記載	12世紀後葉	10.51±0.02	シロヨリガラフ	シロヨリガラフ	10.51±0.02	10.51±0.02	400		
31	12世紀後葉	土壠	土器	縦縫	13.4	砂質	砂質	粘土	無	未記載	12世紀後葉	10.52±0.02	シロヨリガラフ	シロヨリガラフ	10.52±0.02	10.52±0.02	400		
32	12世紀後葉	土壠	土器	縦縫	16.81	砂質	砂質	粘土	無	未記載	12世紀後葉	10.53±0.02	シロヨリガラフ	シロヨリガラフ	10.53±0.02	10.53±0.02	400		
33	12世紀後葉	土壠	土器	縦縫	12.0	砂質	砂質	粘土	無	未記載	12世紀後葉	10.54±0.02	シロヨリガラフ	シロヨリガラフ	10.54±0.02	10.54±0.02	400		
34	12世紀後葉	土壠	土器	縦縫	11.5-12	砂質	砂質	粘土	無	未記載	12世紀後葉	10.55±0.02	シロヨリガラフ	シロヨリガラフ	10.55±0.02	10.55±0.02	400		
35	12世紀後葉	土壠	土器	縦縫	13.8	砂質	砂質	粘土	無	未記載	12世紀後葉	10.56±0.02	シロヨリガラフ	シロヨリガラフ	10.56±0.02	10.56±0.02	400		
36	12世紀後葉	土壠	土器	縦縫	13.8	砂質	砂質	粘土	無	未記載	12世紀後葉	10.57±0.02	シロヨリガラフ	シロヨリガラフ	10.57±0.02	10.57±0.02	400		

第4表 高屋敷館遺跡出土土器観察表③

画が見られ、内外面ともハケメ調整の9世紀中葉以前の資料で、高屋敷館遺跡周辺の野尻遺跡群を含めた出土資料群の中では最古段階にあたる。また、既刊報告書では非掲載の羽釜は、遺構外出土でロクロ使用の小型のもの（80）と非ロクロの大型のもの（77）が確認されており、大型のものは鉗部分を手で摘み延ばすような形で作出しておらず、外面のヘラ削りによる調整で突出させている。

墨書のある資料は、食膳具の第7号溝出土資料（55）のみで、刻書のうち煮炊具は、性格不明工房跡（第11号住居跡）出土の甕体部内面に刻まれたもの（9）や外面に刻まれた資料（59・118）がある。食膳具の刻書資料では、細い線描き気味の刻線（19・50・88・110・111）が多く、幅広の資料は遺構外出土の73のみである。その他、外面底部に縄の圧痕が見られる資料（8）、内面見込み部分に爪による刺突が多数見られる資料（122）がある。

食膳具は、口唇の打欠が顕著で、今回図示した資料についても13点含まれる。遺構外出土の85は、キザミ状に打欠を行っており、輪花を意識したような作出である。表採の126は、打欠後に破断面を擦り、小皿状に整形している。

また、食膳具のうち皿形の資料について、口唇端部を特徴的に作出するものが多くみられる。

A1：口唇端部を浅く窪ませ、内傾させるもの

（16・31・39・76・107）

A2：口唇端部を浅く窪ませ、平滑気味にさせるもの。外側はそのままのばし上げるタイプ

A2a（47・85・93・94・100・121）と「て」の字気味に突出させるA2b（49・52・58・97・99・120）がある。

A3：A2のタイプに近似するが外側側が面取り気味に平滑面が作出される（34・105）

B：凹線まで至らないものの、平滑な面が作出され、「て」の字気味に突出する（11・78・86）

これらの資料は、既報告の高屋敷館遺跡および隣接の野尻（3）遺跡でも出土例があり、一部須恵器扱いの資料も含まれる¹⁰。主だったものについて第

58図に図示した。既刊報告書ではこれらの資料について10世紀中葉以降の年代を想定しており、高屋敷館遺跡の内郭内でも切り合い関係で古手の堅穴建物（住居）跡側から出土している。

その他、耳皿が第80号住居跡（43）と遺構外（123）から出土している。

既報告の出土土器は、主に11世紀前葉までを主体とする資料として捉えられ、12世紀初頭とされた年輪年代測定の結果と開きがある。

本章第3節で報告する橋脚の分析結果は、既報告の分析値とほぼ変わりない結果となり、高屋敷館遺跡の東側で11世紀末～12世紀初頭に橋脚が設置されたことと人々の活動は確実となった¹¹。

今回図示した資料の中で、遺構外出土資料の中にかわらけに類似する資料が3点（72・115・119）含まれる（第59図）。それ以外に54に図示した第4号溝跡の第1層出土の小皿は、ロクロかわらけの小型のタイプに類似した資料である。

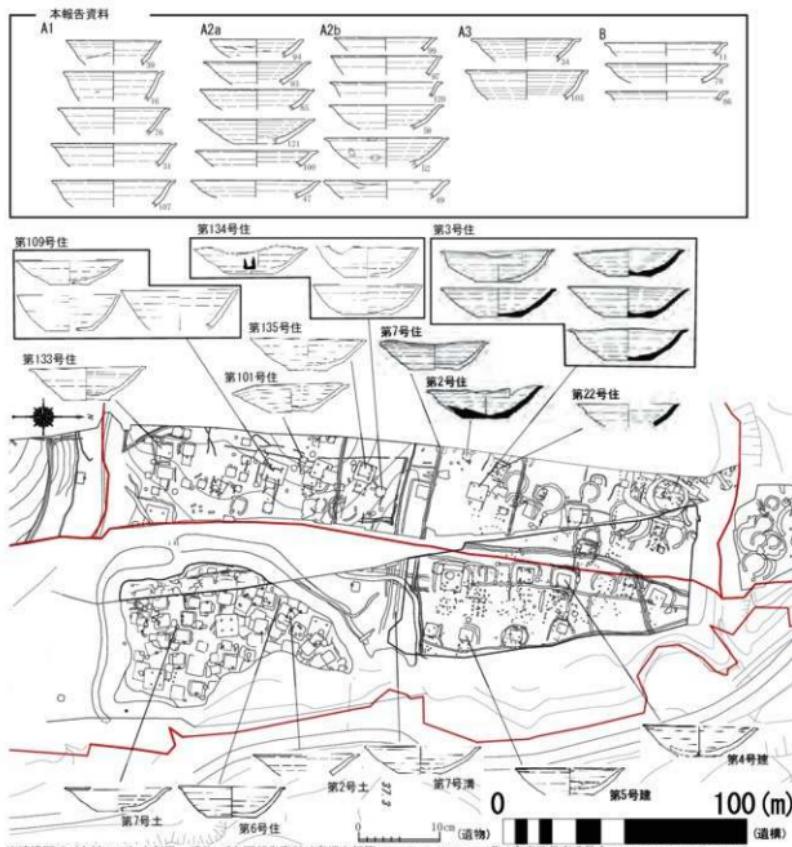
周辺の野尻（4）遺跡の遺構外からも12世紀後葉と判断されるかわらけ（手づくね・ロクロ）、白磁碗等が出土し、平泉期における居館が存在した可能性の指摘があり（羽柴2010）、12世紀代に高屋敷館遺跡及び周辺での土地利用は確実であると言える¹²。

註

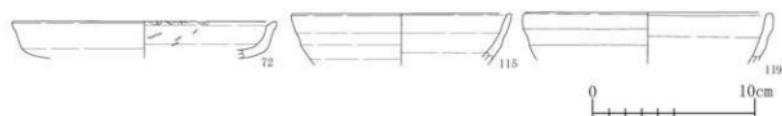
1) 図示した資料のうち青森県立歴史博物館所蔵の資料は、筆者が資料調査で遺跡全般を実査した。その結果、「野尻（4）遺跡II」で須恵器扱いの資料は、他報告書で土師器とされている資料と同質で、赤緋脛骨片を含み、色調は褐色～赤褐色を呈する。火葬痕や煮ね焼痕は確認されず、胎土分析も実施されていない。また、口唇端部以外の特徴として見込部分を押す資料が定量含まれている。

2) 塵について、既報告の報告書（青森県立歴史博物館第243集団II）が見られる。東側の橋脚が検出された地点の木柱が入った上層断面図の図示が見られないが、近接する図15の上層断面図と橋脚の位置関係で比較すると、V字状の塵の段階ではなく、前段階の段状の塵の時点で機能していたものと推察される。これらのことと総合すると12世紀前半の時点では塵が開口していたことになり、一度埋め戻され、その後再度塵が掘削されたということになる。その他の、既報告の第2号井戸状構造（青森県立歴史博物館第243集団214）は南壁の落ち跡から検出されているが、実質的には塵が埋設ないしは上面近くまで埋設した状況での掘削が想定される。

3) 前脚註2) の意味で、いわゆる「防衛性集落」は、確かに10世紀後葉以降に溝や土塁が伴う集落跡はあるが、遺物が頗る少ない時期での再利用や使用について考慮する必要があり、その扱いについては十分注意すべきである。



第58図 口唇端部に特徴のある食器具及び既往調査での出土状況



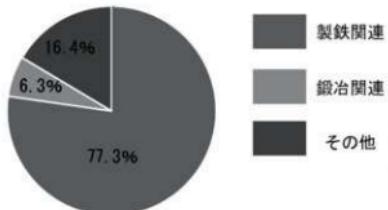
第59図 かわらけ類似の資料

第2節 高屋敷館遺跡出土鉄関連遺物について

平成6・7年の青森県埋蔵文化財調査センターによる発掘調査では、鉄関連遺構2基(第1号・第2号鉄関連遺構)が検出されたほか、多量の鉄関連遺物が出土した(青森県教育委員会1998)。報告書では、鉄関連遺物について大型の炉壁片が一部掲載されているほか、羽口・鉄器が集成されているものの、遺構毎の出土重量以外の情報は不明であった。そこで、出土鉄関連遺物約356kgについて、肉眼観察のほか、強力磁石(TAJIMA製PUP-M)や標準磁石を用いて分類を行い、重量の測定・集計により、遺跡内で行われた鉄生産工程を推定した。

・出土鉄関連遺物の概要

製鉄関連と鍛冶関連遺物が出土している。北～西側の遺構からの出土重量が多くみられる。特に遺構内では、第1号鉄関連遺構、9B、土壙、北塙、9溝、遺構外では、調査区中央を南北に縱断するグリッドラインL～0において、15kgを超える顕著な出土重量が認められる(第5表、第63図)。種別毎の比率を出土重量全体でみると、工程の判別が難しい遺物(羽口、鉄塊系遺物、含鉄鉄滓、再結合滓、石、その他)を除いて、製鉄関連遺物(炉壁・流動滓・砂鉄焼結塊・炉内滓)が77.3%、鍛冶関連遺物(楘形鍛冶滓・鍛冶滓・鍛造剥片)が6.3%認められ、製鉄関連が大半を占める。遺構毎にみると、製鉄関連遺物は、全体的にも出土量が多い第1号鉄関連遺構、9B、土壙、北塙、9溝から10kg以上出土しており、特に第1号鉄関連遺構からは、製鍊炉で一般的に排出される種類の遺物が認められる(第62図2・3、5～18)、50kgを超える遺物が出土している¹⁾。鍛冶関連遺物は、製鉄関連遺物に比べて量が少ないものの、60B、3溝から1～2kg程度出土している。



第60図 鉄関連遺物出土重量比(種別毎)

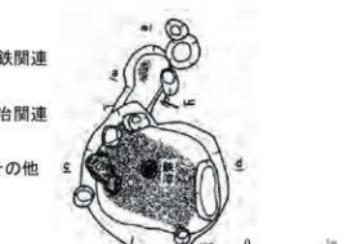
・高屋敷館遺跡の鉄生産

集計の結果、製鉄関連遺物が大半を占める。製鉄関連遺物を主体とし、他の遺構と比べて多くの出土重量が認められた北西側の範囲(第1号鉄関連遺構、9B、土壙、北塙、9溝付近)に製鍊炉が存在した可能性が高いと考えられる。特に分析結果から、鋼精鍊炉と報告された第1号鉄関連遺構Pi18については、歪はあるものの、平面形が青森県周辺で検出される製鍊炉(竪形炉)に近い形状を示しており、また、製鉄関連遺物を主体として、遺構内で最も多い出土重量が認められたことから、製鍊炉であった可能性が高い。土壙や北塙、9溝からも多量の出土が認められた結果については、流れ込み等の要素も考えられるが、第1号鉄関連遺構との位置関係から排滓場として利用されたと想定される。鍛冶関連遺物については、出土重量は少ないが、鍛冶炉が検出された第2号鉄関連遺構のほか、鍛冶関連遺物主体で出土重量が多い60B、3溝の位置関係から、近い範囲での集中がみられる²⁾。このように、本遺跡では、製鉄・鍛冶関連遺物ともに出土重量の多い遺構が北側に多いことから、近接した位置において、集落内自給を基本とした製鍊から鍛冶までの一貫した鉄生産が行われていたと考えられる。

註

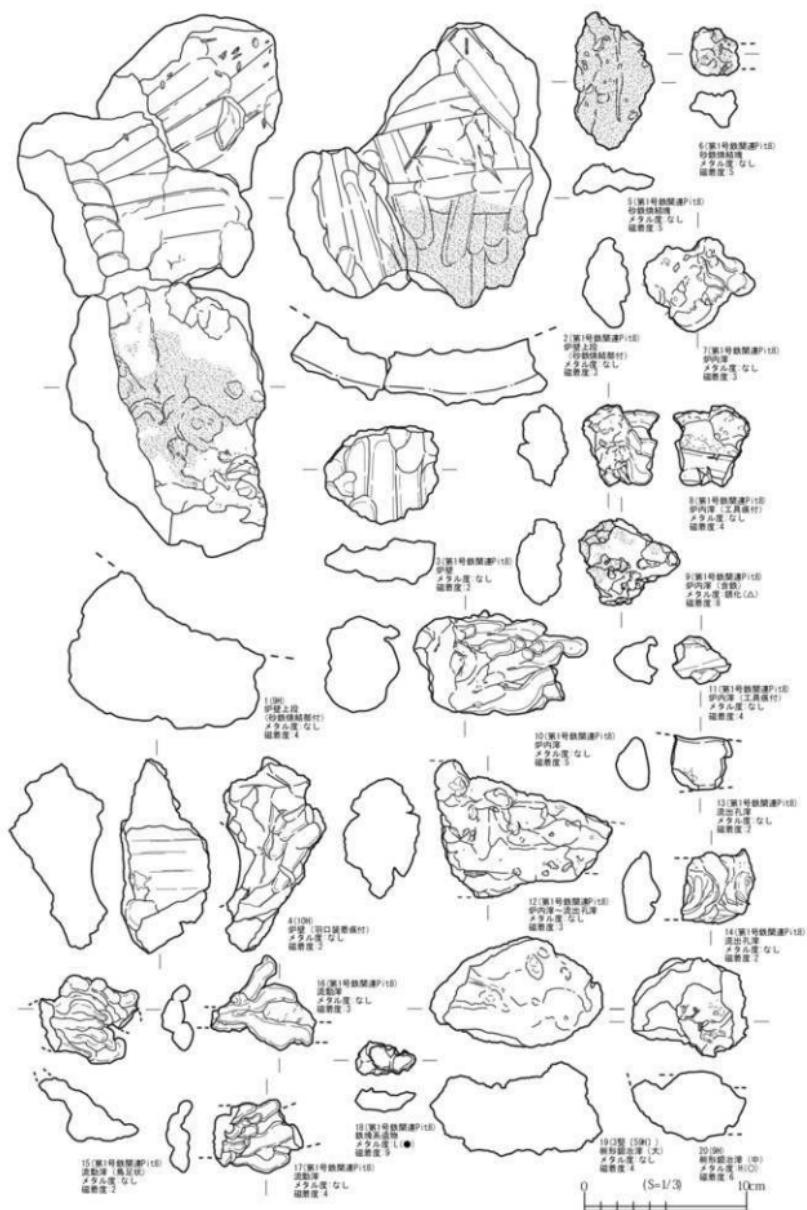
1) 第1号鉄関連遺構と側の出土鉄関連遺物については、遺物カードの遺物名のほとんどが両者併記された状態であったが、出土位置から判断し、第1号鉄関連遺構と側を区別して記載した。なお、両者とともに鉄関連遺物の傾向が似ているため、一括りは高いと考えられる。

2) 第2号鉄関連遺構については鍛冶炉が検出されている点から、60Bと3溝については出土重量の観点から取り上げた。鍛冶炉については、炉周辺からの鉄関連遺物出土が少ない例(炉を検出した遺構より北周辺遺構での出土量が多い場合)もあることから、第2号鉄関連遺構は鍛造剥片のみの出土であるものの、ここで取り上げた。60Bと3溝については出土重量は多いものの、炉と思われる部分が認められないことから、排滓場の可能性が高いと考えられる。



青森県埋蔵文化財調査報告書第243集(青森県教育委員会1998)図193を一部抜粋・スケール追加

第61図 第1号鉄関連遺構内Pi18



第62図 高屋敷館遺跡出土鉄鏃頭遺物

法規名	炉號	羽口	流動率	容積 燒結 燒結量	炉内厚 (mm)	炉内厚 (容積)	古板 厚度	板塊高 度	細部 厚度	板形板 厚度 (合計)	總厚 度 (合計)	總重 量 (kg)	熱面 面積 (m ²)	熱面 面積 (kg/m ²)	その他 (未記入)	石 計(4)
第1号鉄開道	9394	438	16,850	952	18,108	529	6,541			9	49	12	45	1	130	54,247
第2号鉄開道(新)	404														249	732
第3号鉄開道(旧)	65														7	
20H	302	5			113							15				425
20A	1,052									1,126						21,880
20	38	13			23											73
20A	8	6														14
20	450	100	880		314											21 (15.1)
20	248	4	53		58	3	108			36					34	143
20																33
20H	16	88			49					573						824
20H	1,052	1,496	1,098	159	2,609	506	233	11	479	295	65	8		428	26,015	
20H	348		347		90											765
20H	152		152		72											2,935
20H	31	2,102			71						254				6	2,664
20H	34	171	111		4					148	195					573
20H	18	80	23		160		126	164	305			9	1		887	
20H	13														40	53
20H	23	38	3		33	31	63			11	6					206
20H	19						22		44						7	
20H	1,812	4	55													1,887
20H	1,806	12	420													2,224
20H	26	620	32		499	97				781						2,056
20H	20		23												10	69
20H	1	1,208					212			512		178			290	2,402
20H	44	32					8								3	
44H												91				91
47H	180											102				160
49H	128	2,061	30									338			11	113
50H	31	39					12		43			134			6	2,687
50H	612	7	61				186					1,542				1,123
50H	31											143				143
52H		10										58				10
54H	29	800	21				171		457	255	248	87	6	84		21,230
54H	111	463	116		163		591		1,853	2,026	3,016	31		356		58,324
54H	341	69	123		282		845		276	198	2,861	94	807		7,137	
54H	612	7	61				186									
54H	31						24					15				69
64H		22										73				73
66H																
68H	87	810					42									939
70H	44	800	19		312		81		50		69					1,044
70H	36														3	
72H	642															842
74H	259	87	79		272		94		464		212				98	1,560
76H	302	4			564				59							930
77H	2	1,265	45				29									3,371
77H	228	9	8		72		79		83							538
77H	154								139							233
81H	26									168						30
82H	10	26	93		77		9					135				350
84H		6								160						166
86H	88	51	118		77	81	40		464		73			7	105	1,099
86H	1,894	7,712	11,887	8	6,127	409	12			164	35			7	612	22,650
87	1,463		1,463			0				23						500
87	2,140	5,004	4,824		9,200	407	215		1,266		49	308	70		2,158	21,640
87	247	41			64	0					239			8		661
87	83	181	255		1,820	0	6		368			62				3,924
87	1,377	94	12,858	89	2,650	500						5				1,754
87	304				199	129									20	530
117H		10														10
127H	51	18	34							182						23 (315)
137H		26														26
147H		2														10
157H	21		4													28 (35)
167H		55														50
227H												35				68
307H		636					64	45								636
327H							24									24
337H							13	13			15					254
347H		26										186				186
427H		32											8		41	
447H												92				43
457H																136
467H																27
477H		27														9
487H		65										23				497
497H	211	4,018	10	790	50	11		48							4	5,352
507H	221	2,392		579	227	82		44	101			8			120	6,597
517H	947	137		1,617	291			154	611			12			130	3,376
527H	77	46	336		3,007	340	449		319			106	64		371	5,107
537H	221	337		2,274	377	11		214							9	3,333
537H	359	111	6,541		5,854	474	319		259	279					352	15,440
547H	562	24,061	110	3,216	705					25	293				80	30,707
547H	844	508	24,181	19	3,634	458			84						42	211 (34,191)
547H	1,600	463	21,418		5,682	1,663	110		850	212		1		2	53	32,083
547H	101	106	1,279		1,834	62						2				32,084
547H	534	302	180		528	74									5	174
547H															5	
557H		18														19
567H	6,709	178	490	258	747		101		293							1,830
計(g)	48,627	36,230	141,319	1,807	75,403	7,811	10,323	218	13,713	3,002	5,688	15	614	3,298	7,340	355,696
重量比(%)	14%	10%	40%	0.5%	21%	2%	2%	0.06%	4%	1%	2%	0.004%		1%		1,015
重量比(%)																1,015

※斜線は各層の出力重量を示す

※網掛けは出土量15t以上

第5表 高屋敷館跡出土鉄関連物重量集計表



第3節 酸素同位体比年輪年代法による 高屋敷館遺跡東塙橋脚の年代検証

箱崎真隆(国立歴史民俗博物館)・木村淳一(青森市教育委員会)・木村勝彦(福島大学)・佐野雅規(早稲田大学)・對馬あかね(名古屋大学)・李貞(総合地球環境学研究所)・中塚武(総合地球環境学研究所・名古屋大学)

はじめに

青森県青森市浪岡地区(旧浪岡町)に所在する国史跡高屋敷館遺跡は、平安時代に築かれた土壘および壕で囲まれた環濠集落である。弥生時代の環濠集落のような大規模な環濠と土壘を伴うことから、本遺跡は発掘当初から全国的注目を集め(青森県教育委員会 1998)、中央政権と蝦夷との関係に絡めた「防禦性集落」論の代表的存在として認知されてきた(三浦 1995, 三浦ほか 2006など)。

本遺跡において、環濠が築かれた年代は、他の遺構群と白頭山・苦小牧テフラ(B-Tmテフラ)との関係から、10世紀第3四半期と推定されてきた(船木 2009など)。なお、B-Tmテフラの年代は近年の研究により西暦946年と確定した(Oppeheimer et al. 2017, Hakozaki et al. 2018)。一方で、その終焉時期には2つの説があり、土器編年や性格の近い他の集落遺跡の盛衰状況から遅くとも11世紀前葉とする説(八木 2006, 船木 2009)と、本遺跡の東塙で見つかった橋脚の年輪年代(光谷 1998)などを根拠に12世紀初頭とする説(畠山 2006, 三浦 2006など)が示してきた。

後者の根拠のひとつ、橋脚の年輪年代の報告(光谷 1998)は、年輪数と年代のみが示され、統計評価値(t 値)や年輪幅データのグラフが示されていない簡略的報告であった。光谷は日本各地の数多くの古建築や考古遺跡で木材の年輪年代を決定してきた実績を持つことから(奈良国立文化財研究所 1990, 光谷 2007など)、本遺跡橋脚の年代測定結果にも一定の信を置くことができる。しかし、年輪年代法では、得られた結果を確定的なものとするため

に、独立した別の研究機関・組織による検証が必要とされている(Baillie 1995)。そこで筆者らは、光谷が年代測定した2点を含む3点の橋脚を対象に、酸素同位体比年輪年代法(中塚 2015など)を適用し、光谷が求めた年代を検証した。

試料と方法

試料は高屋敷館遺跡の東塙から出土した橋脚(アスナロ材)3点である(表1, 図1)。各試料からノコギリを使用して円盤状の分析試料を分取した(図2)。試料はいずれも樹皮を欠くが、2点には辺材が認められた。試料の横断面を研磨し、0.01mm精度で年輪幅を計測した。得られた年輪幅の時系列データをクロスデーティングして、試料間相互の年代決定を試みたが、それは成功しなかった。

次に、各試料の横断面から厚さ1mmの薄板を切り出し、「板ごとセルロース抽出法(Kagawa et al. 2015)」に従って、セルロースを抽出した。1年輪ごとに酸素同位体比測定用セルロース試料を切り出し、銀箔で梱包して、総合地球環境学研究所の熱分解元素分析計-同位体比質量分析計を用いて酸素同位体比を測定した。得られた酸素同位体比の時系列データを、年代既知のアスナロ酸素同位体比標準年輪曲線(コード名(暫定): A001CH01、青森県東通村猿ヶ森埋没林、青森市石江遺跡群、中道遺跡などのアスナロ材から作成(箱崎ほか 2014, 2015, 2016a, 2016b, 2017など))とクロスデーティングして、曆年代を決定し、先行報告の年代(光谷 1998)と比較した。なお、クロスデーティングは、一般的な年輪考古学の方法に従った(Baillie 1982, English Heritage 1998など)。

結果と考察

年輪年代測定の結果、3点の橋脚の酸素同位体比時系列データは、標準年輪曲線A001CH01と極めて良く一致した(表1, 図3)。相関関係の基準3.5を大きく超える t 値を示した)。3点の最外部の年輪年代は、いずれも11世紀末であることが明らかとなった。樹皮が残存しないため、伐採年の特定はできないが、

試料名	年輪数	樹皮	辺材年数	酸素同位体比		t 値(vsアスナロ 分析年輪数 標準年輪曲線)	年輪年代(AD)*	
				分析年輪数	標準年輪曲線		本報告	光谷(1998)
橋脚1	132	-	11	129	13.32	1091	-	
橋脚2	125	-	19	122	14.69	1097	1101	
橋脚4	84	-	-	81	11.06	1085	1106	

*年代に多少の差が見られるが、光谷は成長維持アーチで、筆者らは輪切りの円盤で、それぞれ異なる部位を測定しており、部位ごとの辺材残存量の違いから生じた差であると考えられる。

表1 高屋敷館遺跡東塙出土橋脚年輪年代分析試料の概要



図1 高屋敷館遺跡東堀から出土した4本の橋脚

2点には辺材が残存することから、伐採年は数年～十数年加算して12世紀初頭と見積もることができた。

この結果は、光谷（1998）の先行報告と整合的であった。最外部の年輪年代に多少の差が認められたが、これは光谷と筆者らが完全に同一の部位を測定していない（試料採取の都合上できなかった）ことに起因すると考えられる。

なお、今回の分析に用いた標準年輪曲線A001CH01には、西暦775年の炭素14スパイク（Miyake et al. 2012）の再現試料のデータも含まれる。炭素14スパイクは、アメリカ、ロシア、ドイツ、ニュージーランドの年輪年代既知木材で再現されており（Usoskin et al. 2013, Jull et al. 2014, Gütterl et al. 2015）、年輪年代法において世界共通の年代マークとして認識されている。したがって、今回の検証により、高屋敷館遺跡の橋脚には、世界各地の年輪年代法によって保証された曆年代が付与されたとみなすことができる。

試料の伐採年代は、環塚に橋が築かれた年代とみなすことができ、12世紀初頭まで環塚が存在したことを間接的に示唆する。ただし、この年代は、あくまで橋が築かれた時代の上限を示すということに留意すべきである。

高屋敷館遺跡の近くに所在する野尻（4）遺跡か

らは、12世紀後半の「かわらけ」が検出されており、この地域の土地利用は12世紀代にも継続していた可能性が指摘されている（木村 2015）。今回の分析によって、高屋敷館遺跡の重要な遺物に、確固たる年代が付与されたことは事実であるが、周辺遺跡におけるそのような遺物の検出状況からみて、これを高屋敷館遺跡の集落の終焉、さらには「防衛性集落」の終焉と直線的に結びつけることは早計といえる。

木村（2015）は、高屋敷館遺跡の周辺において、「防衛性集落」論に絡む大きなスケールの研究と、土器編年や遺跡内の住居変遷など小さなスケールの調査・研究が先行し、周辺の遺跡群を含めた中間的スケールでの総体的な研究がまだ十分ではないことを指摘した。文書史料の乏しい地域における集落の性格変化や利用実態の把握は容易ではない。今後も高屋敷館遺跡とその周辺遺跡において、様々なスケールでの多角的分析・検証を積み重ね、確固たる事實をもとに実態の把握につとめるべきである。

引用文献

- 青森県教育委員会（1998）『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集。
- Baillie MGL. (1995) *A slice through time:dendrochronology and precision dating*. Routledge, 170p.
- Baillie MGL. (1982) *Tree-ring dating and archaeology*. Croom Helm, 274p.

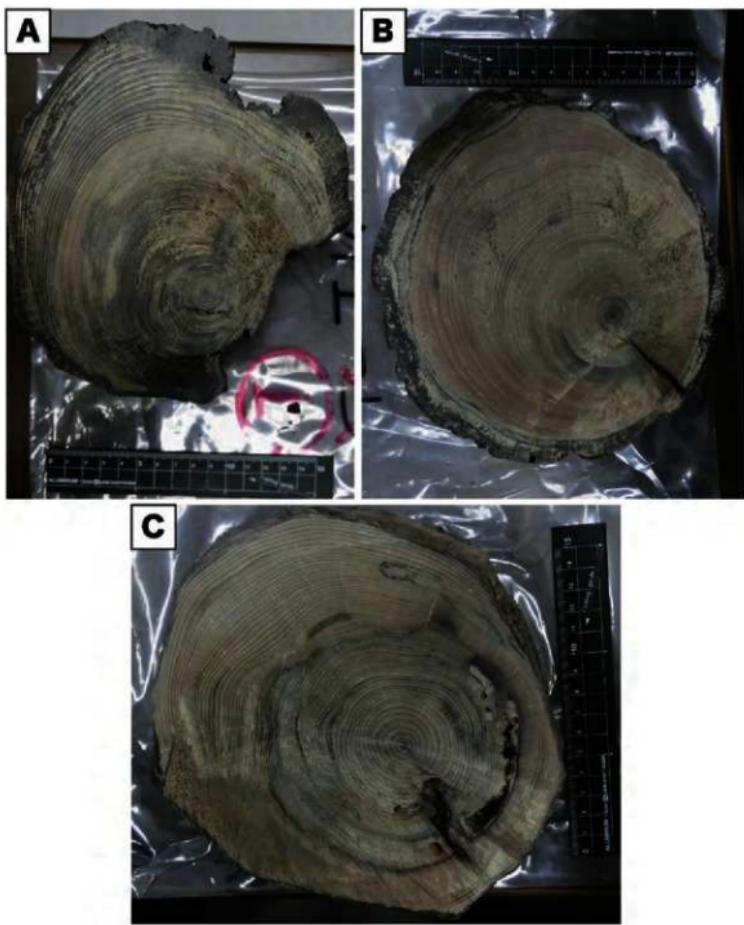


図2 年輪年代分析に用いた円盤試料

A:木柱1, B:木柱2, C:木柱4

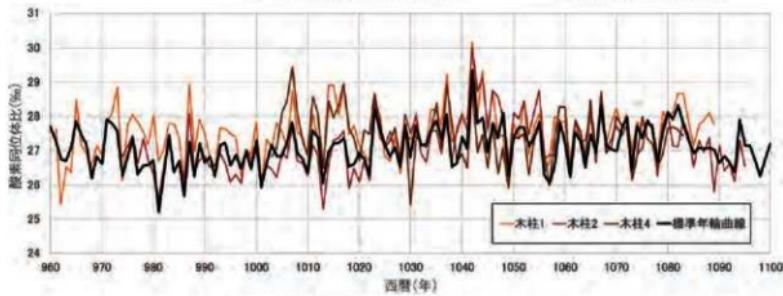


図3 標準年輪曲線と各試料の酸素同位体比時系列データの比較

- English Heritage. (1998) Dendrochronology: guidelines on producing and interpreting dendrochronological dates. http://www.hclm.org.uk/upload/_pdf/Dendrochronology.pdf.
- 柏木謙蔵 (2009) 「「樹と土壠」結界表現の諸相-青森市高屋敷遺跡遺跡の基本的考察-」『秋田考古学』53, 23-48頁。
- Göttler B., Adolphi F., Beer J., Bleicher N., Boswijk G. (2015) "Rapid increase in cosmogenic ^{14}C in AD 775 measured in New Zealand kauri trees indicates short-lived increase in ^{14}C production spanning both hemispheres". *Earth Planet. Sci. Lett.* 411: 290-297.
- 柏木謙蔵・木村勝彦・佐野雅規・李貞・劉馬あかね・小林謙一・設楽政樹・木村淳一・中塚武 (2017) 「中道遺跡・川原館遺跡出土木材の酸素同位体比年輪年代測定」『川原館遺跡・中道遺跡・東早稲田遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第129集, 256-259頁。
- 柏木謙蔵・木村勝彦・佐野雅規・対馬あかね・李貞・木村淳一・小林謙一・中塚武 (2016a) 「年輪酸素同位体比にもとづく青森市石江遺跡群の古代～中世の出土材の年輪年代測定」『第31回日本植生学会大会創立80周年記念大会要旨集』, 20頁。
- 柏木謙蔵・中村俊夫・木村勝彦・中塚武 (2014) 「北日本古樹を用いた酸素同位体比標準年輪曲線の構築」『名古屋大学加速度計業績報告書』XXV, 54-61頁。
- 柏木謙蔵・中村俊夫・大山幹哉・木村淳一・佐野雅規・中塚武 (2016b) 「西暦774-775年のOICイベントと酸素同位体比標準年代法に基づく青森市新屋町 (I) 遺跡アヌコ材の年輪年代の検証」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』XXVII, 34-39頁。
- 柏木謙蔵・中塚武・佐野雅規・木村勝彦・中村俊夫 (2015) 「北日本猿ヶ森砂丘の埋没木を用いた酸素同位体比標準年輪曲線構築」『第30回日本植生学会北海道大会要旨集』, 56頁。
- Hakozaki M., Miyake F., Nakamura T., Kimura K., Masuda K., Okuno M. (2018) "Verification of the annual dating of the 10th century Baioutshan Volcano eruption based on AD 774-775 carbon-14 spike". *Radiocarbon* 60(1): 261-268.
- 畠山昇 (2006) 「調査報告 高屋敷遺跡」『北の防御性集落と活動の時代』同成社, 15-24頁。
- Jull AJT., Panyushkina IP., Lange TE., Kokarkskii VV., Mylne VS., Clark RJ., Salzer MW., Burr GS., Leavitt SW. (2014) "Excursions in the ^{14}C record at A.D. 774-775 in tree rings from Russia and America". *Geophysical Research Letters* 41(8): 3004-10.
- Kagawa A., Sano M., Nakatsuka T., Ikeda T., Kubo S. (2015) "An optimized method for stable isotope analysis of tree rings by extracting cellulose directly from cross-sectional laths". *Chemical Geology*, 383-394: 16-25.
- 木村淳一 (2015) 「青森市高屋敷館遺跡周辺の方形区画について」『金沢大学考古学紀要』37, 21-30頁。
- 光谷拓美 (1998) 「年輪年代法による木柱と板状木製品の年輪測定」『高屋敷遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第423集, 356頁。
- 光谷拓美 (2007) 「米山 (2) 遺跡出土井戸柱の年輪年代」『米山 (2) 遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第433集, 205-206頁。
- Miyake F., Nagaya K., Masuda K., Nakamura T. (2012) "A signature of cosmic-ray increase in AD 774-775 from tree rings in Japan". *Nature* 486(7402): 240-242.
- 三浦圭介 (1995) 「北奥・北海道地域における古代防御性集落の発生と展開」『独立歴史民俗博物館研究報告』64, 197-222頁。
- 三浦圭介・小口雅史・潘藤利男 (2006) 「北の防御性集落と活動の時代」同成社。
- 中塚武 (2015) 「酸素同位体比年輪年代法がもたらす新しい考古学研究の可能性」『考古学研究』62(2), 17-30頁。
- 奈良国立文化財研究所 (1990) 「年輪に歴史を読む－日本における古年輪学の成立－」『奈良国立文化財研究所学報』第15冊。
- Oppenheimer C., Wacker L., Xu J., Galván JB., Stoffel M., Guillet S., Corona C., Sigl M., Cosmo NB., Hajdas I., Pan R., Breuker R., Schneider L., Esper J., Fei J., Hammond JOS., Büntgen U. (2017) "Multi-proxy dating of the 'Millennium Eruption' of Changbaishan to late 946 CE". *Quaternary Science Reviews* 158: 164-71.
- Usoskin I.G., Kromer B., Ludlow F., Beer J., Friedrich M., Kovaltsov G.A., Solanki S.K., Wacker L. (2013) "The AD775 cosmic event revisited: The Sun is to blame". *Astron. Astrophys.* 552: L3.
- 八木光則 (2000) 「北上盆地からみた東北北部の古代社会」『北の防御性集落と活動の時代』同成社, 133-155頁。

報告書抄録

ふりがな	くにしけきたかやしきだいせきかんきょうせいほうこくしょさん						
書名	国史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅲ						
副書名							
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第124集						
編著者名	木村淳一、設楽政健、箱崎真隆、木村勝彦、佐野雅規、對馬あかね、李貞、中塚武						
編集機関	青森市教育委員会						
所在地	〒030-0801 青森県青森市新町一丁目3番7号 青森市役所駅前庁舎 TEL 017-718-1392						
発行年月日	西暦 2019年3月19日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	世界測地系(JGD2000)		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
高屋敷館遺跡	青森県青森市新町一丁目3番7号	市町村 道路番号	北緯	東経			史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
高屋敷館遺跡	集落跡	平安			土器部・須恵器・陶文土器 ・からび・軽便通遺物		
要約	国史跡高屋敷館遺跡の平成18年度から平成30年度までの環境整備工事について。事業概要・設計・施工内容を所収した。 また、平成28年度に青森県埋蔵文化財調査センターから譲りを受けた、平成6~7年度実施の国道7号浪岡バイパス建設に係る発掘調査の出土資料について、史跡整備に必要な追加情報、分析結果を所収した。						

引用・参考文献

- 青森県 2018「青森県史通史編」
- 青森県教育委員会 1983『青森県の中世城館』青森県文化財調査報告書
- 青森県教育委員会 1999『野尻(2)道跡・野尻(3)道跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
- 青森県教育委員会 1999『野尻(4)道跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
- 青森県教育委員会 1998『高屋敷館道跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
- 青森県教育委員会 2005『高屋敷館道跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第393集
- 青森県教育委員会 2005『山元(1)道跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第395集
- 青森県教育委員会 2005『林ノ前道跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第396集
- 青森県教育委員会 2006『野尻(3)道跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第411集
- 青森県教育委員会 2006『林ノ前道跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第415集
- 青森県教育委員会 2008『山本道跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第401集
- 青森県教育委員会 2011『乳井茶臼船』青森県埋蔵文化財調査報告書第507集
- 青森県教育委員会 2014『明神沼道跡・福島城跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第548集
- 青森県教育委員会 2009『史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅱ』青森市埋蔵文化財調査報告書第588集
- 青森市埋蔵文化財調査報告書第588集
- 青森市教育委員会 2014『E江道跡群発掘調査報告書Ⅳ』青森市埋蔵文化財調査報告書第116集
- 青森県教育委員会 2018『野尻(4)道跡発掘調査報告書Ⅱ』青森市埋蔵文化財調査報告書第123集
- 弘前市教育委員会 2014『油伝(1)道跡発掘調査報告書』
- おいらせ町教育委員会 2018『史跡阿光坊古墳群整備報告書』
- 外ヶ浜町教育委員会 2012『山本道跡』
- 浪岡町教育委員会 2009『平成12年度浪岡町文化財紀要Ⅰ』
- 浪岡町教育委員会 2005『平成16年度浪岡町文化財紀要V』
- 浪岡町教育委員会 2005『史跡浪岡城跡環境整備報告書Ⅲ』
- 富山大学人文学部考古学研究室 2002『津軽寒川城跡』富山大学研究室報告第7冊
- 岡本孝之 1998「外土壇櫛塙集落の性格」『異異』第16号pp.2-11
- 木村淳一 2013「青森県高屋敷館道跡周辺の方形区画について」『金沢大学考古学紀要』第37号pp.21-30
- 久保辰男 2001「集落構造からみた南関東の弥生社会」
- 工藤清志 1997「考古学研究における境界性・中世・古代への視点から」『青森県史研究』第1号pp.129-145
- 岡根達人 2017「三重の壁をもつ北奥の古代集落-青森県外ヶ浜町山本道跡-」『古代国家と北方世界』pp.210-221
- 羽柴直人 2010「東日本初期武家政権の考古学的研究-平泉勢力圏の位置づけを中心に-」
- 三浦公介・小口雅史・斎藤利男 2006「北の防御性集落と激動の時代」
- 八木光則 2011「北奥の古代末期圓郭集落」『古代中世の蝦夷社会』pp.55-90
- Renfrew, C. and Bahn, P. 1991 Archaeology :Theories, Methods and Practice. Thames and Hudson, London.

暨刊埋藏文化財關係報告書一覽

青森市埋藏文化財調査報告書第121集
国史跡高屋敷館遺跡
環境整備報告書Ⅲ

発行年月日 2019年(平成31年)3月19日

編 集 聖森市教育委員会

〒030-0801 青森県青森市新町一丁目3番7号

青森市役所駅前庁舎

TEL 017-718-1392

青森オフセット印刷株式会社

〒030-0802 青森県青森市本町二